裁でも法律的制裁でも、此の良心の制裁の廣大無邊にして而かも完全無缺なるには及びも付かぬ譯である。されば自己の行爲は自己の良心に問ひて之を行ひ、自己の良心の制裁に依つて決すれば、人間社會には個人の行爲に對する法律の制裁が不必要になる譯であるが、何うも實際には左樣は行かぬ。と言ふのは人慾の私に驅られて其の良心が曇り易いからである。

斯る良心と常識とは何う違うかと言ふに、良心は自己の行爲を制裁するが、他人の行爲は判斷せぬ。常識は自己の行爲も他人の行爲も、社會の行爲も國家の行爲も、皆之を判斷する。良心は時代的性質を帶びずして永久に不變であるが、常識は文野の度に應じて其の程度の差を

生ずる。即ち常識は其の時代の文明の反映であるから、野蠻時代の常識は文明時代の常識と同一ではない。故に倫理的にも道德的にも科學的にも、其の進步發達の程度に應じて常識の程度が定まるものであると同時に、心理的狀態に對しての判斷は勿論、物質的文明に對しても判斷の正中を必せねばならぬ。即ち常識の働きは心と物との兩方面に亙るものであるが、良心の制裁は唯だ自己の內心のみに限られてゐる從つて良心の曇りは一に精神的錬磨に依つて人慾の私を取り除くと共に宇宙に充滿する所の光明を發ち、常識の缺乏は自己の心的修養以外に專ら科學的智能の錬磨に依つて圓滿を計らねばならぬ。斯くて良心は專ら先天的に待つて後天的に其の曇りを取り去り、常識は專ら後天

的に待つて先天的に其の萠芽を發してゐるものであるが、兩者共に修養を要するのは勿論で、其の修養の程度如何は即ち人格の程度如何を證明するものである。

四、理想と常識

常識の缺乏してゐる者は智慧が足りない、注意が足りない、分別が足りない、又た福利を專にして之を人に分つことを知らぬ。其の心氣は常に雜然としてゐるから物の整頓が出來ない、即ち順序を誤り規律を失ふ。又た常識の基礎の定まらぬ者は其の心が散亂してゐる、故に一念を其の目的に向つて注ぐことが出來ないと同時に、熟慮沈思と言ふ

ことは望まれぬ、從つて失敗相踵ぐの有樣である。殊に常識の缺乏に依る所の不圓滿は心の偏疾を招きて惡癖を生ずる、其の結果は一事の成ることなくして、折角の努力も寸功を擧げることが出來ない。學生の多くが其の學業の成績の宜しからぬ原因には、不勉强と言ふこともあり、元來の資性が明敏でないと言ふこともあるが、又た一面には心氣の散亂と其の偏疾とが累を爲してゐるのを知らねばならぬ。是に依つて之を觀ると、常識の圓滿に發達した者には智慧がある、注意が深い、分別が定まり、福利を私しない、其の心氣は常に整然として事に臨んで順序が立ち、心が散漫でないから遠謀深慮を運らし得られ、圓滿玲瓏であるから偏狹の痼疾がなく、從つて惡習惡癖を伴はぬから、

學業を修めても業務に就ても常に駸々として圓滿完全なる發達を遂げ得られる。之れ即ち成功ある所以で、成功は常識に待ち、常識は成功を得るの軌道である。此の軌道を辿らなければ其處に人格もなく幸福もなく成功もないのである。

今此處に常識の缺乏に就て手近い例を擧げて見やうと思ふ。例へば地方にある父兄が濫りに其の子女を都會に出す、其の目的は修學にあつても、都會の惡弊惡風を知らずして地方の質朴堅實なる鄕風と同視する所から、其の子女に對する監督を怠ると同時に、浮世の荒波に揉まれたことのない可憐の子女は、尙ほ未だ常識の發達せざる弱年の者として、知らず識らず都會の惡風に感染し、柄にもなき虛飾を喜び虛榮に

趨り、遂には修學の方針を失ひ其の目的を誤り、墮落に墮落を重ねた末は社會の迷兒となり、若くは廢物となつて一生を暗黑界に葬り去ることゝなる。斯くの如きは其の罪固より子女にあるは言ふ迄もないが抑も其の初めは父兄の不注意の罪に歸せねばならぬ。此の不注意と言ふことは判斷を誤るの原因で、其の判斷は常識に待つのであるから、意識の不統一より起る所の不注意は、常識の缺乏に依る誤斷と同一の結果を生じ、其の常識の缺乏は又た意識の不統一を來して茲に不注意といふ變態現象を見るに至るのである。或は村の鎭守の祭禮に多くの迷兒のあるのは、其の母親の不注意に基づくので、假令其の不注意は些々たる事であつても、斯る不注意なる親には多くの場合其の常識の

缺けてゐることが證明せられる。即ち右に述べたやうな單純なる場合の不注意でさへ其の結果は恐るべきものがあるから、複雜なる社會の事物に對する不注意は、更に戰慄すべき禍害を招くに相違あるまい。又た用心して物を控へ目にすることゝ物を咨むと言ふことを混同する者がある。之れは分別の足らぬ所から其の見分けが付かないのである分別の足らぬのは即ち常識が缺けてゐるからである。例へば子供の身體が弱くて困るから食物の用心をさせねばならぬ、胃の爲めには不消化の物は不可ない、甘い物を食べ過ごさせては不可ない、間食も餘り褒めたものでない、適度の運動をさせて食物を控へ目にさへすれば、謂ゆる腹八合に醫者要らずであるから。親たる者は此の點に就て常に

用心せねばならぬのに、恰も食物を咨むやうに思ひ、用心するのをケチ〳〵するやうに誤解し、親がケチ〳〵するのは小兒の將來の爲めにならぬと立派らしい理窟を並べて、其の小兒の欲する儘に食物を與へる時は、却つて益々虚弱に陷らしめ、遂に或は取り返しの付かぬ疾病を惹き起して其の生命を縮めるに至ることもある。斯う言ふ風に用心と咨むのとを差別せぬ母親が世に尠なからぬことゝ思はれる。是れ即ち常識の缺乏せる結果に外ならぬ。斯る母親に限つて無闇に食物を與ふれば其の小兒の成長を速からしめるものと思ひ、又は消化不消化を問はずして小兒の好むがまゝに何物でも與ふれば、其の體格が立派になり筋肉が肥滿するものと一人合點して、他人の忠言を卻ける場合が

多い。其の智慧の無さ加減と言つたら實に驚くの外はないが、之れも常識の缺乏に基くのであるから、他人の忠言ぐらゐでは到底其の非を顧みるに至らぬのである。元來其の子を愛するが爲めには其の子の心身の發達を計らねばならぬ、其の子の心身の發達を計る爲めには精神的に身體的に充分の鍛錬を積ましめねばならぬ。獅子は其の兒を千仞の谷に蹴落して强弱を試めすと言はれてゐるやうに、人も亦た可愛い子には旅をさせねばならぬ、艱難辛苦を嘗めさせねばならぬ、百錬千磨の功を積ましめねばならぬ、之れが即ち其の子を愛する所以で、將來の發達成功は斯くてこそ期し得られるのであるが、世には其の子を愛する所以の道を知らずして、風にも吹かせず雨にも當てず、蝶よ花よと大切がり、美食に飽かせ、美服に馴れしめ、氣隨氣儘に任かせた結果は、遂に非常識の子女たらしめ、其の身體は虚弱、其の精神は柔弱、事に當つて體力も耐えねば精神も堪えぬと言ふ愚物を作り上げるのである。斯くの如きは其の子を愛する所以の道を誤つて溺愛に陷つた罪であるが、此の罪は其の親の智慧の足らぬことを證明してゐる。即ち常識の缺乏より招く所の智識の不足である。又た中には同じ智識の不足でも學識に於て缺乏するものもある。例へば太陽を天照大神であると比喩するのは、天照大神の御德を太陽の光りに擬へたものであるのに、太陽は直に天照大神であると妄信する者などは完全なる常識者とは言へない。或は又た日蝕月蝕を見て日月の病氣であるとし、此

の病氣の爲めに天から毒が降ると信じて、門戸を閉ぢて蟄居する者などが、都會には知らぬが田舍には往々にして見受ける事實である。餘りに智慧のなさ過ぎるにも程があると思へば、其の愚を笑ふよりも寧ろ氣の毒なる感じがする。此の類の實例は殆んど枚擧するに遑もない程であるから、熟々常識の必要を思ひ運らすと共に又た其の圓滿なる發達を希望するの益々切なるものがある。

赤子には常識が未だ備はらぬ、少年にも未だ其の完全を望まれぬ、青年時代に至つて益々修養を深くし鍛錬を重ね、學を磨き業を治め、然る後に其の圓滿を期せられるのであるから、常識は赤子よりも少年に少年よりも青年に、青年よりも壯年に及ぶに從つて益々發達すべき順

序であるが、心氣の雜駁と散漫も亦た此の順序を追ふて益々其の度を加へて來る。即ち少年の時は其の心氣が單純である。赤子の時分は尙更ら單純で、寧ろ無心無垢に近いのである。夫れが年月の經過と共に嗜欲を增して來て、次第に心氣が雜駁となり、益々複雜なる社會の事物に觸るゝに從つて、又た外界より其の心氣を雜駁ならしめられ、其の雜駁の度も亦た益々高くなるのである。例へば小兒の時分には紙鳶を揚げるとか鞠を投げるとか言ふ單純なる遊戯に滿足して、更に餘念の無つた者が、長ずるに從つて花見にも行きたくなり、山にも登りたくなり、甘味い物も食ひたく、美しい衣物も着たく、歌も謠ひたく、音樂も聞きたく、肉慾も滿たしたく、酒も飲みたく、煙草も喫ひたく

なつて、又た紙鳶や鞠の遊びのみには、滿足しなくなるから、學校の教室にありながら演劇の事を思ふたり、或は牛肉屋の二階に於ける昨日の亂痴氣騒ぎを追憶したりする。斯う言ふ風に心氣の雜駁が益々殖えて其の度も次第に高くなると共に、其の間には愉快もあり不愉快も起り、得意もあり失意も生じ、憤怒、悔恨、妄想、執着、煩悶、嫉妬羨望、迷蒙などが相踵いで起り、其の學問を害し、其の識見を破り、心の明鏡は之れが爲めに曇らされて了ふ。既に心の明鏡が曇つた以上は其の鏡に映すべき物體の影を認めることが出來ぬ。其の半面が曇れば半面だけの影を失ひ、其の全面が曇れば全く其の影を失ふことになる。此の影を失ふと言ふことは反面より觀て其の映すべき物體を失ふ

たのと同一であるから、心氣の雜駁を加へて明鏡の曇りを增す丈それ丈、其の心氣は又た散漫して四方に漂離するのである。既に心氣が散漫じて修治することが出來なかつたなら、假令英才多智の者でも其の事業を成就せんが爲めには幾多の困苦を嘗めねばならぬ、況して英才多智ならざる者に於ては、到底其の目的の事業を完成することは出來ないのである。

之を碁客に喩へて見やう。今正に烏鷺の鬪酣にして、赤色の紙を火鉢の火と間違へる程の熱心で、人の聲など耳にも入らぬ眞最中、夜も早や闌けて鷄の鳴く頃となつた時、突如として非常電報が甲の碁客に宛てゝ到達した。夫れは商用であるか又は父母親戚の凶報であるか

封を切らねば判らぬが、兎も角非常電報である以上は大至急を要する問題には相違ない。併し甲の碁客は夫れを受取つたまゝ容易に其の封を切らうとしない。矢張り盤面に向つてパチリ〳〵と石を置いてゐるとは言ふものゝ其の電報が氣に懸る、其の氣に懸ると言ふことが之を電報受領の以前に比べると雜駁になつてゐるのである、同時に盤面に向つて其の一念を專らにすることが出來ない丈それ丈、其の心氣が散漫してゐる。從つて石並が亂れて來て形勢は次第に非運を呈する。其處で止むを得ず煙草を一服と言ふ鹽梅で彼の電報を開封して見た、夫れは一秒一分を爭ふ所の商用である、直ぐに返電を發せねば數千金の得失に關する。併し彼は次の碁の手を考へてゐるから、其の電報を左

の手に持つたまゝ右の手で又た碁を打ち續ける。其の間に返電を打たねばならぬことも頭に散らつく、問題は一局の碁よりも數千金の損得に重きを置かねばならぬが、其處が碁客の癖で、今に勝負が付くから、モー少しの間だ、此の一局が濟んでから返電を打たうと考へることが既に心氣の散漫で、平生は乙の碁客よりも强いものが此の夜に限つて遂に大敗に終り、其の大敗に終つた時が既に返電の期を失した後で、數千金の獲得も亦た之れが爲めに水泡に歸したのであつた。斯る例は獨り碁客のみでなく百般の人事に於て其の類例を見ることが甚だ多いのである。

此の碁客の失敗は思ふべきを思はず、爲すべきを爲さず、思ふべから

ざるを思ひ、爲すべからざるを爲して、其の心氣を散漫ならしめた結果である。若し學生たるべきの本分を思はず、學生としての爲すべきを爲さず、學生たるに背ける行爲を敢てし、學生以外の岐路に趨らば其の結果は此の碁客の失敗と同じく試驗には落第し、學校よりは退學處分を受け、父兄には勘當せられ、親戚知己には見放され、社會よりは指彈され、天にも地にも五尺の身の容れ所がないやうになるであらう。要するに心氣の雜駁を防ぎ、其の散漫を避けて、意識の統一を計るは、常識ある者の當然の處置で、其の雜駁散漫のまゝに放任するは言ふ迄もなく凡庸暗愚の致す所である、或は凡庸暗愚の致す所ならずとするも、少くとも其の期間に於ては一時の心的疾病に罹つたものに

相違ない。凡庸暗愚の者には固より圓滿なる常識のあらう筈はないが假令一時的の者たりとも其の期間丈は常識を缺いてゐたことは爭はれぬ。否之を缺いてゐたのであるから、本來の凡庸ならざる限りは、其の雜念の障害を除き得ると同時に、雲霧を排いて再び天日を見ることが出來る。要するに目的とする所の一事一業を成就せんが爲めには、當然其の思ふべきを思ひ、當然其の爲すべきを爲すのが、即ち心氣の雜駁と散漫を避くべき第一着手の方法である。それであるから友人と共に談話しつゝ文章を作るなどは宜しくない事で、其の談話に實も入らず、文章にも實が入らず、謂ゆる二兎を追ふ者は一兎をも獲ざるに終るものである。故に談話なら其の談話に全幅の精神を注ぎ、文章なら

其の文章に全幅の精神を注がねば、到底目的を達することが出來ないが、何うして草履持から關白になり得たかと言ふ事には多く注意する人がないやうである。勿論豪傑割據の亂世でもあつたから時運の然らしむるにも依るが、其の最も見逃がすべからざる事は、草履持であらうが槍持であらうが、其の任務の如何を問はず其の職責を重んじ、瑣事を論ぜず其の全力を注ぎ、常に全幅の精神を捧げて事に當つたと言ふ美點である。凡そ凡庸愚者の常として、詰らぬ事などは何うでも宜いと高言するが、實は其の詰らぬ事さへも出來ないのに、何うして夫れ以上の事が出來る筈があらうか。斯う言ふ者に限つて一事一物に全幅の精神を傾注し、其の目的に向つて全力を用ふることを爲ない。否爲ないのではない出來ないのである。其の心氣が雜駁で散漫なる以上は、何うして全力を傾注することが出來やうぞ。瑣事ではあるが食事の傍ら新聞雜誌などを讀む者があるが、之れとても其の食事に實が入らず、又た新聞雜誌にも實が入らず、心氣が散漫して甘味く飯を食ふことは出來ない筈である。若し夫れでも甘味く飯を食ふことが出來ると言ふ者があれば、其の人にもて新聞雜誌を讀まずに食事にのみ專らであつたなら一層甘味く食へる筈である。新聞雜誌であるから深き注意も要せずして好い加減に拾ひ讀みも出來るが、夫れが非常に責任のある讀み物か、但しは一身の浮沈に關する問題でゝもあつたなら、必

ずや其の食事がお留守になるに相違ない、若し食事に專らならば其の讀み物其の問題に向つては全力を注ぐことは出來ぬ。故に甘味く食事をしたいと思ふならば、其の食事に全力を注いで他の雜念を去らねばならぬ。充分に其の讀み物を玩味咀嚼せんとならば、又た必ずや其の讀み物に向つて全力を注がねばならぬ。之れと同じく自分は學生であると知つたなら、其の學生たるべき本分に向つて全力を注ぎ、決して心氣を他に散漫せしめてはならぬ。之れが爲めには學生と言ふことに對しての深き趣味を有つことが必要である。食事でも遊技でも讀書でも作文でも、亦た皆趣味を有たねば其の最善の結果を得ることは出來ぬ、固より全力を注ぐべき念慮が起らぬ、腹の減つた時分には粗食で

も非常に甘味いと言ふのは、一切の雜念を排して其の食に全力を注ぎ非常なる趣味を以て飛び付いて食ふからである。凡そ何事に向つても飢ゑたる時に食を得た程の趣味を以て全幅の精神を捧げたなら、決して不成功の嘆を發するには及ばぬ筈であるから、成功と言ふ事に對しては心氣の散漫は大禁物たると同時に、深き趣味を有つと言ふ事は非常に大切なる事柄で、『好きこそ物の上手』とは即ち此の點を言ふのである。

然るに此の全力を注ぎ全幅の精神を捧げんが爲めには、氣力の弛みと言ふものが又た非常な禁物で、何時でも其の氣を張り詰めて居らねばならぬ。氣が張り詰めてゐる間は健康であつたが、一旦氣の弛むと同

時に死んで了つたと言ふ實例は世間に甚だ多いのを見ても、亦た氣を張ると言ふ事が自己の目的成就に對して如何に大切であるかゞ知られる譯である。そも〳〵氣の張ると言ふのは、内にあるものが外に向つて擴張伸展する有樣で、恰も壓搾したる空氣が非常なる膨脹力を以て擴大するのと同じやうな狀態を言ふのである。峻坂に車を押すの時逆潮に向つて船を漕ぐの場合、其處に一寸の氣の弛みもあつてはならぬ。充分に其の氣を張り詰めて流汗淋漓、謂ゆる一生懸命に車を押し櫓を漕がねばならぬ。之れが即ち努力である。併し其の車を押すに非常なる興味を有ち、其の櫓を漕ぐに滿腔の希望があるならば、自から强ひて氣を張り詰めずとも、自然に氣の張りが湧き出て來て、愉快に

努力することが出來るが、若し力めて櫓を漕がねばならぬと言ふ場合車を押すべく餘儀なくさるゝと言ふ場合には、其の努力に苦痛を伴ふものである。妙齡の女子が恐怖心を抱きつゝ深夜人なき野路を通行するの努力には苦痛の感が伴ひ厭惡の情が起る。之れは自から强ひて其の氣を張り詰めるの止むを得ざるが爲めであるが、同じ女子が親の病氣の危篤に際し、孝心深き一念から月影暗き鎭守の森に病氣平癒の祈願を籠むるに當つては、其の野路の寂寞に對して何等の恐怖もなく厭惡もないのである。此の場合には其の努力に苦痛なるものが伴はぬ。之れは自から强ふることなくして其の氣が張り詰めてゐるからである魚群山を成して殺到し來るの時、激浪怒濤を物ともせず其の腕に渾身

の力を籠めて舟を進むるの漁夫には、何等の苦痛の感も厭惡の情も起らぬのは、求めず强ひずして其の氣が張り詰めてゐるからである。斯う言ふ風に努力にも苦痛を伴ふものと伴はざるものとがあり、氣の張りにも强ふると强ひざるとがある。假令其の努力の結果が同一であるにしても、吾等は苦痛を忘れ若くは快感を抱きつゝ自然に湧き出づる氣の張りを以て事に當るの妙境に達したいものである。要するに氣の張りは努力となり、努力は氣を張らしめるものであるが、其の努力、其の氣の張るに快感を抱くことは、之れに苦痛厭惡に伴ふに比ぶれば其の成果の速にして且つ吾等の精力を消耗するの少きことは、到底同日の論ではない。彼の睡魔頻りに襲ひ來るの時、腿に針して勇氣を奮

ひ、强ひて其の氣を張りつゝ書を讀み學に從ふのと、己は既に書中の人となり、興趣湧き來つて卷を蔽ふに暇あらず、其の張り詰めたる氣の何時弛まんやうもなく、全く睡眠を忘れて夜の明くるをも知らずと言ふ有樣と、何れか其の成果の速かで、又た精力消耗の少きかは、青年學生の夙に實驗を重ねた所であらうと思ふ。故に吾等は强ひて氣を張り詰めたる苦痛の努力よりも、自からなる努力に依つて生じたる愉快なる氣の張りを有たねばならぬ。

斯る氣の張りは願くば永久に有ちたいものであるが、併し人間の弱點として自から一張一弛を免がれぬ、從つて榮枯あり盛衰あるので、青年は何時迄も青年たるを得ず、老者は遂に衰耄するの止むを得ざるも

のがあるが、而かも吾等は榮枯衰耄を眼中に置かず、常に氣の張りを以て勇奮邁進するを理想とし、且つ實行努力せねばならぬ。若し其處に一點の氣の弛みを生ずれば油斷となり、其の油斷は大敵となり、蟻の穴から千丈の堤が崩れることもあるのである　明智光秀が三日天下と謂れるのは、織田信長を本能寺に斃して氣の弛みを生じた所へ、神籌鬼策の羽柴秀吉が疾風迅雷の勢を以て攻め上つたからで、天王山の戰は秀吉の氣の張りと光秀の氣の弛みとの戰であつた。同一人でも氣の張つた時は平常に比べて遙かに卓越した人になると同じく、氣の弛んだ時は遙かに劣弱なる人となるのであるから、假令當時に於ける秀吉と光秀とが、其の智謀才略に於て優劣なしとするも、氣の張りと

氣の弛みに於て非常なる懸隔があつたから、脆くも唯だ一戰の敗衂に影も形も留めなくなつた譯である。平生は筆と箸との外に重い物を持つたことのない文士でも、深窓の中に育つた纖手細腰の令孃でも、ソレ火事だと言ふ場合には意外に重い物を持ち出すことが出來ると言ふのは、其の氣の張りの然らしむる所で、即ち平常の自己に卓越したる例證である。之れに反して終日山河を跋渉し、日暮れて目的地に達したる後は一時に氣の弛みが出て、草鞋の紐を解くのにも力なく、俄に疲勞を覺えて身を起すさへ懶くなるものである。氣の張りと氣の弛みとの差は斯くの如く大いなるものがあるから、學問を勉強するにも、事業に從ふにも、勞務に服するにも、常に氣の張りを以て之れに當つ

たならば、必ずや卓越なる成功を見るを得て、天下何物か又た難きことあらんやとの壯烈勇猛の意氣を生ずるであらう。琴の音さへ其の絲を張らねば嘈々たることが出來ぬ、弓弦も弛みては箭を射るに足らぬ即ち人間萬般の事も亦た其の氣の張弛に依つて成敗利鈍の岐るゝは勿論の次第である。

前に心氣の散漫を碁客の例證に於て説明したのであるが、此の心の散漫は心氣の充實しない證據で、意識の不統一から起るのは勿論だが、其處には氣の張りが無いことを證明する。故に氣の張りのない者、氣の弛みのある物を讀む有樣は、喩へば彈力を失つた護謨毬のやうに、敲いても擊つても反動がなく、敎へても諭しても感じがなく、唯だ呆

然として書物に對するのみであるが、世の子弟には斯う言ふ類の者が往々にして見受けられる。或は書物に向ひながら其の心は外に趨り、讀むでもなく讀まぬでもなしと言ふ間に、鳥が飛べば其の方に眼を向け、犬が走れば之れを目送すると言ふ風で、其の心は少しも書物の上に無い者がある。斯る心氣の散漫と弛惰とは、自己の自覺に依つて抑制し統一し激勵するでなければ、到底其の効を見ることが出來るものではないから、右に述べた子弟の類の如きも、其の自覺の機を待つより外に又た何等の良策もあるまいと思はれる。尤も其の自覺は自己の衷心より起るものと、外界の刺戟に依つて呼び起さるゝものとの別はあるが、其の何れにしても自覺に依つて心の散漫を防ぎ、其の氣の弛

心氣の惡習惡癖

逸る氣とは何ぞ

みを引き立てることの必要なるは勿論である。

此の心の散漫、氣の弛みなどは、一種の惡習であるが、尙ほ此の外に逸氣、戾氣、暴氣、客氣、惚氣、亢氣、衒氣、凝氣、惰氣などがあつて、何れも惡習惡癖たるを免がれぬ。其の逸氣とは氣の逸ることで、一時は疾風砂塵を捲き怪火枯草を燒くの勢はあるが、忽ちにして頓に萎靡沈衰するが常である。氣の張りは充實堅牢で持續的であるが、氣の逸りは急激熾烈で一時的である。青年の血氣に任せて直進猪突以て其の功を急ぐは氣の逸りであつて、一時は勇氣凛然として嚮ふ所敵なしと言ふ勢であるが、忽ち疲勞を覺えて倦怠に陷り、一蹶一躓に遭へば一頓挫折復た振はざるに至るものである。恰も花火線香を燃したの

と同じで、其の放射する火花は一時强烈を極めても、亦た直に衰退消滅するを免かれぬ。故に氣の逸る者の仕事は急速敏捷と言ふ美點はあるが、同時に粗漏杜撰と言ふ缺點がある。書物を讀むにしても一氣呵成的に數十卷を讀み破り、文字を書くにしても一呼吸に千字萬字を作し得るのであるが、悲い哉其の書物の全體を正當に理解して自己の物とするのには、餘りに輕卒に過ぎ速解に趨りて誤斷あるを免かれず。又た其の寫し得たる千字萬字は、他人をして之を讀ましむるには餘りに毆り書きで、而かも落字誤畫の數々に目を蔽はしむるものがある。若し幸にして此等の速解誤斷もなく、落字誤畫も無いとした所で、其の迅雷疾風の勢は早く盡きて、半途にして其の業を抛擲し、遂に或は

目的の一端をも完成し得ずして終ることもある。我等日本人には何うも此の習癖が抜けぬやうであるから、青年者は特に茲に注意を加へねばなるまいと思はれる。

逸る氣は張る氣にて似て而かも幾多の缺點を有するものであるが、戻氣即ち戻る氣は弛む氣に似て尙ほ幾多の害を伴ふ所のものであるから一種の癖習として排除すべきものたるは勿論である。例へば砂礫の山を登るに、一歩を進めば半歩を退き、一尺前に登れば五寸後に下ると言ふやうに、折角事業に對し學問に向ひ、氣の張りを以て奮勵邁進を爲しつゝある間に、屢次氣の弛みに襲はれて逆戻りする場合がある。其の結果は學問の退歩、事業の退歩、財政の退歩、産業の退歩、人智の退歩、道德の退歩、社會の退歩、文明の退歩として現はれるのであるが、其の原因は氣の戻りに胚胎する。尤も個人としての氣の戻り、社會としての氣の戻り、國家としての氣の戻りなど、其の戻りに大小あり强弱あり廣狹あるとは言へ、退歩と言へる結果を生ずるのは同一である。即ち學生の氣の戻りは落第と言ふ結果を生じ、商人の氣の戻りは損失と言ふ結果を生じ、勉强家の氣の戻りは怠惰と言ふ現象となり、坂で車を押す者の氣の戻りは顚覆と言ふ結果となる。故に氣の戻りの招く所は啻に進歩に對する退歩のみでなく、又た實に善に對する惡と言へる反對の結果を見るのである。坂に於ける車の顚覆は其の車の後退ばかりでなく、其の正位置を變じて不正位置としたのであり、

商人の損失は其の利益に反對の結果を招いたのであるやうに、人倫に對する氣の戻りは不倫の行爲となり、道德に對する氣の戻りは不道德となるから、日常吾等の行爲に於て寸毫も氣の戻らぬやう注意ありたきものである。尤も此の氣の戻りは一時の發作に依る場合が多く、既に氣の張りを以て勇奮しつゝあつた間の變象と見られ得るのであつて初めより絶對に氣の張りのない者には、又た氣の戻りのあらう筈がないから、或期間の後には再び元の氣の張りに復する望があり得ることは、彼の砂礫の山を登るに一歩を進みて半歩を退き、一尺前に登つて五寸後に下りつゝも、尙ほ其の攀登を繼續すれば、遲れ馳せながらも遂に山頂に達し得らるゝのと同樣ではあるまいか。夫れにしても尺前

寸後よりは尺前又た尺前の優れるに若くはないから、氣の戻りの癖習は宜しく除却すべく非常なる決心と實行とを要せねばならぬ。殊に後退の甚しきに至つては寸前尺後の有樣で、一寸進む代りに一尺後に下る狀況であつて、更に其の極點に於ては善を惡に正を不正にと言ふやうに善惡利害是非得喪正邪黑白を顚倒するに至る場合もあるから、特に青年者の爲めに之を誡めて置かねばならぬ。

斯う言ふ譯で氣の戻りは氣の弛みに似て幾多の弊害を伴ふものであるが、更に氣の張りに似て而も非なる所の氣の逸りに類する亢氣なるものがある。之れは自己の得意に對する一種の自負心より出でて他を見下す所の癖習で、偏癖の資性、器宇狹小の人には有り勝ちの缺點と言

ふべきものである。柔道を少しく稽古した者が直ぐ人を投げたがり、半可通の者が如何にも通人らしく見せ掛け、新しい書物を繙いて初めから二三枚を讀んだ計りで、フン、フン是れかと鼻の先であしらひ、人の談話を聽きながら未だ其の要點に達せざるに、早くも其の談話を遮つて是非の論評を試み、僅に數千金の産を成せるにも拘はらず、數十百萬の富を成さんこと何の苦もなしなどと揚言するの類は、其の氣の亢ぶる癖習として世に其の人の甚だ多きを見るのである。謂ゆる生兵法は大怪我の基で、斯る亢ぶる氣の癖ある者に限つて到底現狀より進歩する筈なく、却つて業破れ功成らず、遂に悲境に沈淪せざるを得ざる有樣に陷らぬとも限らぬ。彼の逸る氣は粗漏杜撰の缺點ありとも、一時は疾風迅雷の勢を以て奮進するのであるが、此の亢ぶる氣の一たび生ずるに至つては、最早自己の尊大のみを認めて驕傲に陷り、自己の力を計らずして他を壓せんと試むるに至るから、其の結果は退歩か失敗か二者何れかの一に居らねばならぬ。即ち學者にして亢ぶる氣が起れば研究の繼續は出來ず、學生にして亢ぶる氣が起れば其の學問は發達せず、藝術家にして亢ぶる氣が起れば最早其の藝術は進歩しないのである。凡そ驕慢倨傲は皆此の氣の亢ぶりが外に現はれた所の形而下及び形而上の狀態で、崇高なる人格を保たん者の執るべき態度でなく、又た完全なる常識者の心に快しとせざる所たるは無論である。此の亢氣と最も相似たるものは衒氣である。之れは物を衒ふの氣で、亢氣

は小なりとも其の基礎があるが、衒氣は基礎なくして基礎あるかの如く其の表面を飾り立てるのである。學者として相當の學識もあり、商人として多少の資本もあり、藝術家として相應の技量もある者が、自己の力以上に自己を買ひ被り、亢氣暴溢して他を壓するが爲め、發して驕慢僑傲となるが即ち氣の亢ぶりであるが、物を衒ふと言ふのは、其の技量もなく、學識もなく、資本もなくして、唯だ僅に末梢の一端を捉へて恰も其の全般を包有せるが如く他を欺罔するのであるから、亢氣に比ぶれば更に其の害の甚だしきものがある。家に糊口の資もなきに美服を飾つて他人の耳目を欺き、目に一丁字なきに口に大言壯語を擅にし、何等の學識なくして片語交りの外國語に愚民を吹き飛ば

すなど、皆衒氣の然らしむる所で、斯る癖習は常識者の執らざるは勿論、自己の人格を失却して識者の笑を招き、世の指彈を受くるの外又た何等の得る所もないのである。若し學生にして斯る衒氣あらしめば其の學業は皮想に走り、決して目的の成功を見るの期がないのである亢氣の積極的外面的なるに對して、其の消極的內面的なるものは惚氣である。例へば自己を美男なりとし美女なりとして自惚れ、才子なりとし佳人なりとして自惚れ、學者なりとし政治家なりとして自惚れ教育者なり宗教家なりとして自惚れ、權勢家なり富豪家なりとして自惚れ、貧なれども華族なりとして自惚れ、虛弱なれども勇氣ありとして自惚れ、小國なれども强國なりとして自惚れ、弱年なれども思想家

なりとして自惚れ、普通開業醫なれども博士大家を壓倒するに足ると
して自惚れ小商人なれども地方經濟の牛耳を握れりとして自惚れ、學
生なれども鄕里の第一人者なりとして自惚るゝの類、擧げて數ふるの
遑がないのである。此の自惚るゝと言ふのは夫れ丈の實力なく價値な
きにも拘はらず、獨り自己のみに於て實力あり價値あるものと見做し
て得意然たるを言ふので、他人の眼から見て實際に夫れ丈の價値のな
いものである。併し亢氣のやうに外面的積極的でないから、驕慢倨
傲にして他を壓するの弊はないが、假令內面的消極的でも其の自惚心
は自から顏色風姿進退擧動に現はれるから、見る者をして嘔吐を催さ
しむるの感がする。例へば容貌の醜き者が如何にも天下無類の美人た

るかの如く自惚るゝ態度を作り、又は子供ながらも大人らしく自惚る
ゝ擧動を爲すの時、其處に常識を認め人格を尊重するに足るの價値が
あらうとも思へないのである。若し夫れ實際に學者たり、實際に政治
家たり、實際に富豪たらば、自から求めずして世上の定評があるので
あるが、其の實際に學者たらざる所に自惚が起り、又た實際に富豪た
らざるが爲めに自惚れて、斯くて自己を慰むると共に、自己に對して
自己を誇るを以て滿足しつゝあるのである。故に他人の評言の如きは
耳にも入れず、空嘯いて自己の卓越を自負する所に相當の慰安と得意
とがあるのである。されば自惚心は一面には自己の考ふるが如き實力
と價値との存在を世人に依つて認められざる反動として起り、又た一

面には實際夫れ丈の價値と實力なきが爲めの反證として自惚心あるに至れるを首肯することが出來るから、其の將來に發展の望なきは勿論である。

衒氣、亢氣、惚氣などが常識を脱して人格の價値を失ふものたるは言ふ迄もないが、暴氣に至つては更に其の甚だしきものがある。此の暴氣は殊に青年者に於て最も多く見る所の習癖であつて、動もすれば恐るべき破壞性を之れに伴ふものであるから、暴氣ある者に對しては常に肅靜、謹愼、自制、密察と言へる良藥を飲ましめねばならぬ。喧嘩口論などは暴氣ある者の一般の習ひで、敢て物珍らしい譯でもないが夫れが高じて殺人犯となり放火犯となるに至つては、遠く人間界を脱

して禽獸よりも尙ほ劣れる者である。勿論其の喧嘩口論なるものは既に蠻風で、人格ある者の行ひ得ざる所、將た常識ある者の敢てせざる所であるが、非常識の者に至つては、三度の食事よりも尙ほ且つ喧嘩口論を好む者のあるのは、之を好む者は度外としても、社會の爲めに實に悲しむべく憂ふべき次第である。彼の電車燒打事件、交番所燒打事件の如きは、此等暴氣の非常識者に依つて行はれたものに外ならぬ斯の如きは餘りに明瞭なる惡行暴擧で、其の是非を論ずるさへ不快であるが、同じく暴氣の結果として之れと少しく趣を異にするものが外にある。夫れは世俗の謂ゆる『向ふ見ず』の行爲で、暴虎馮河の勇と言ふのは夫れである。凡そ勇氣にも大勇があり、小勇があり、沈勇

客氣とは何ぞ

があり、義勇があり、虚勇があり、暴勇がある。其の表面には勇あるが如く見せ懸け、内は實に怯懦なるのが虚勇である。其の暴勇に至つては前後の辨へもなく、是非の判斷もなく、固より利害休戚などを考へず、又た之は考ふる丈の智識もなく、唯だ破壞的に狂暴を敢てするのであるから、其の暴虎馮河の勇に出づるは無論の事、恰も卵子を以て岩に向ふの暴擧に類する行爲が甚だ多い。是れ皆暴氣の然らしむる所で、特に青年血氣の者に對して深く誡めねばならぬ重要事である。暴氣に次ぎて更に青年を誡むべきは客氣である。客氣は謂ゆる移り氣であるが、而かも根據なき移り氣、定見なき移り氣で、狂人走れば不狂人も亦た走る底の移り氣を言ふのである。彼の附和雷同と言ふことは即ち客氣の然らしむる所で、其の附和雷同には何等の據るべき理由がない、理由がないから其の行爲の善たり惡たり是たり非たるを考ふる暇を有たぬ。假令其の暇があり得るにしても、客氣に驅らるるの餘り殆んど無我無中であるから、自己が自己の行爲を判斷することさへも忘却してゐる始末で、他人が騒ぐから自分も騒ぐ、其の騒ぐ理由は判らぬが之れに雷同すると言ふのが、常識を缺く者に有り勝ちの客氣で、既に常識に依つて其の理由を究め、其の行爲の是非曲直を判斷する以上は、其處に客氣なるものゝ起り來る譯はないのである。故に客氣に驅られたと言ふことが、即ち其の無謀なるを示してゐるから、其の結果も亦た無謀なるものたるは勿論である。

氣の張りに正反對なる氣の弛みが、氣の戻りと或點まで類似してゐることは既に述べたが、其の氣の弛みに伴ふて又た惰氣なるものが生じて來る。併し惰氣なるものの總べてが氣の弛みからのみ生ずるのではない、尙ほ外にも其の原因がある。倦怠、疲勞、艱苦、不遇、若くは滿足などが即ち其の原因である。心に弛みが出來て張り氣を失へば、最早奮鬪勉勵するの勇氣も生氣もないのが即ち惰氣であるが、一たび此の惰氣の爲めに襲はれたなら、精神上にも氣力がなく、身體上にも緊張力がなく、恰も骨の無い海鼠のやうで、元氣を失ひ勇氣を失ひ事に當つて懶く、手を下し心を用ふるのが面倒になつて來る。或は又た曠日瀰久同一の事を繰り返し、而かも變化なく發展もなき場合には自から倦怠を生ずる。此時に當つて其の倦怠に伴ふものは惰氣である例へば戰爭が永引いて少しも進捗せず、兩軍對峙して互に塹壕生活を爲すの時、其の塹壕內の兵士は敵も味方も倦み飽きて惰氣を生じ、過ぐる戰の勇猛心は何處へやら、早く平和の克復を思ふやうになり、國民も亦た其の恤兵後援に疲れて、何時ともなく惰氣に襲はれるやうになる。而かも一旦惰氣に襲はれた以上は、之を初めの勇猛心に復することは非常なる困難である。又た艱苦に遭遇して之れに打ち勝ち得ざる者は、既に其の精力を消耗したる結果、恰も燈火が其の油を失ひて火光次第に衰へ行くが如く、惰氣盛んに起りて又た奮鬪の勇なきに至るのである。或は時其の人に利なく、幾多の事業も失敗に終り、艱難

辛苦も水の泡、空しく英才を抱いて轗軻不遇の嘆を發するの時、世の味氣なさを嘲ちては、知らず識らずの間に惰氣に襲はるるものである或は之れと反對に或る一事を成し遂げて心に滿足を得たるの時、小成に安んずる者の常として先づ一と安心と言ふ弛みが起る、此の弛みに乘じて襲ひ來るのが即ち惰氣である。丁度食事を濟ませて滿腹すれば暫らくは惰氣に充ちて仕事も手に就かず、殊に美肴の爲めに食量の度を過ごした場合などは、其の惰氣が一層甚だしいのと同樣である。要するに惰氣を招く所の原因は二三にして止まらないが、其の如何なる場合を問はず何れも氣の張りを失へる結果であるから、惰氣に依つて生ずる所の現象には、退歩、不成功、無氣力などの甚だ忌むべきもの

はあるが、決して進歩も發達も將た成功もないのであるから、將來有爲の青年が其の前途の光明を望むに當つて、苟且にも惰氣を生ぜざるべく堅き決心の臍を固めて、常に氣の張りを保たねばならぬのは無論の事である。

然るに此處に張り氣に似ることの最も近くして、而かも大に差別のあるものがある。夫れは即ち凝り氣である。張り氣は全局に亙つて其の向ふ所に充滿し、其處に一分の隙もないのであるが、凝り氣は唯だ一局部に限つて其の向ふ所に沒頭し、我が心既に我が心にあらざるが如く其の事物の爲めに奪はるるのであるから、全局殆んど間隙のみである。元來一事一物に向ふの時、我が心は其の事物を包有せねばならぬ

筈であるのに、其の事物の爲めに我が心を奪はるるから、其處に我なる者の存在が認められなくなる。即ち其の事物を成し遂ぐべき我と言へる主體が、却つて客體たる其の事物の爲めに制せられて主體たるの實を失へるものが凝り氣である。故に凝り氣には自由もなく自在もなく、圓轉活達の妙法もなく、前へも進めず後へも退けず、右へも行けず左へも廻れず、唯だ其の事物の爲めに制縛せられて、全く精神の自由を失つてゐる。既に精神の自由を失つてゐる丈でも非常なる缺陷であり、無上の損失であるのに、若し其の向ふ所の事物、及び其の事物に對して取る所の進路が誤つてゐたならば何うであらう。其の結果は必ずや悔恨、懊惱、失望、煩悶の種子ならぬはなく、假令臍を噬むとも到底及ばぬ次第である。即ち酒に凝る者は酒の爲めに己れを奪はれ其の酒を飲むは實は酒を飲むのでなくして酒の爲めに呑まれてゐるのである。碁に凝る者は碁を打つのではなくして碁の爲めに打たれてゐるのである。要するに酒の爲めに又た碁の爲めに我なる者が其處に存在せぬ。唯だ形に於ての我なる者があつても、心に於ての我なる者は死んでゐるのであるから、我に對する我なる者の自覺がない。自覺がないから我の存在を認めぬ、從つて人格もなければ常識もない。故に理非を考へ善惡を判たずして唯だ其の凝る所の事物の爲めに捕虜となり、金錢の奴隷となり、悖德の行爲となるも之を顧みないのである。又た顧みるの遑がないのである。何となれば既に一事一物の爲めに精

神上の捕虜となつてゐるから、周圍の狀態に對しては全く盲目で何等の色別も付かねば又た判斷も付かぬ。されば隣家から火を失して我が家に及ばんとしてゐるのに、尙ほ且つ碁を圍み花牌を弄びて顧みざるが如きは即ち其の一例である。故に藝術に從ふ者が張り氣を變じて凝り氣となれば、忽ち藝術の爲めに捕虜となつて自己の存在を失ふから自己が藝術を研くのではなくして、藝術の爲めに自己が支配されることと恰も操縱人形のやうである。即ち藝術の奴隷となつて了ふのである。或は政治の奴隷となり、蓄財の奴隷となり、衣服の奴隷となるなど、其處に人格が認めらしないのである。其の衣服の奴隷と言ふのは、衣服に凝るの餘り其の食物を減じ、或は美食を粗食に代へ、たとひ身體

の營養不良に陷つても、尙ほ且つ食物の減額より得たる所を以て之を衣服の資に投じ、啻に美服を飾るのみでなく、又た其の衣服の色合から縞柄に至るまで之を撰擇するの極端なること驚く計りである。之れが一層嵩ずれば則ち衣服狂となるので、蓄財狂、小說狂、酒狂、遊蕩狂、政治狂、藝術狂などが出來るのである。されば道を歩きながら身振り手振りしつゝ周圍の狀態には目も吳れず、後指さゝれて笑はれてゐても頓着しない所の演劇狂なども、田舍の政治狂になると政治の何物たるも知らずに一廉の政治家を氣取り、役にも立たぬ狂奔に其の家財を傾け盡して、進退茲に谷まるの後、始めて目の覺める者などもある。凝る氣の弊は遂に斯る耽溺狂態を演ずるに至るものである

から、何處までも自己の存在を認めつゝ其の事物の爲めに捕虜とせられず、自己の人格を又た其の事物の爲めに奪はれずして、常に精神的自由を確保せねばならぬ。而かも世には張り氣の作用を凝り氣の作用と誤認し、若くは凝り氣の作用を張り氣の作用と誤解するものがあるから、特に此處に多くの言葉を費した譯である。

斯の如く凝り氣の爲めに一事に耽溺して遂に狂態を演じ、或は逸り氣の爲めに粗漏杜撰を顧みず、戻り氣に依つて是を非に變じ、利を害に變じ、亢ぶる氣の爲めに驕慢倨傲に陷り、衒氣に依つて皮想に馳せ、或は自惚れて其の眞價を誤り、暴氣に乘じて事物を破壞し、客氣に驅られて前途の光明を失ひ、惰氣の爲めに噬臍の悔を招くなど、何れも

常識の缺乏に原因せぬものはないが、要するに人の性情は多種多樣であり、人の境遇も亦た多種多樣であるから、從つて思想も複雜となり言行も千態萬狀であるが、併し之を一貫する所の條理なるものがあつて、是を是とし非を非とすることは古今東西皆一徹である。然るに若し是を非とし非を是とするものがあるならば、开は條理に暗きもので即ち非常識の人である。斯る非常識は其の性情にも依り境遇にも依るのであるが、或は拗戻にして蹉躓を招き、或は惡辣にして危害を及ぼし、或は不平鬱積して自暴自棄に陷るものなど、其の心的疾病に輕重はあるにしても、斯る疾病を根治して更に性情の美點を助長するに努めることは、人間として生れ來れる以上、自己の爲めに社會の爲めに

當然の本務でなければならぬ。されば日常の行爲に關しても專ら助長の作用を行ひ、敢て或は剋殺の行爲に出づるを誡めねばならぬ。剋殺は助長に反する非常識の行爲で、事物の破壞性及び殘忍性を帶びてゐる。花を愛して其の根に培ひ、學を好んで其の道に勵むは、即ち助長の念あるが爲めで、之れに依て美花を開かしめ、之れに依て學を進むることが出來る。然るに剋殺の行爲に依り其の草木を蹂躙り、其の枝葉を折り拷らば、花も開かず實も結ばず、或は根柢より枯死せしむるに至ることもある。若し夫れ學を好む者を制壓して其の心を他に向はしむるが如きも、亦た剋殺の大なるもので、百姓の子供に學問などが要るものかと言つて、其の子の手から書物を奪ひ取る親などのあるのは、非常識に基づく所の殘忍剋殺の行爲である。或は官衙學校の門扉神社佛閣の壁柱に、墨黑々と縱横に塗り汚し、或は名畫妙墨の額幅に對して朱墨を加へ、又は好んで寶器佳什を毀傷するなどの狂妄放漫剋殺破壞は、其の無意識的たると意識的たるとを問はず、慥かに拗戻偏僻の性情より出づるもので、畢竟ずるに非常識に基づく所の惡習惡癖たるは勿論である。而かも斯る非常識者に限つて己を是とし他を非とするもので、其の愚や實に憐むべきの極みである。

されば常識の切要なるは今更ら言ふ迄もなく、其の非常識者の拗戻狂妄放漫剋殺の行爲と雖も、常識の養成に依つて或る程度までは改善せしむることが出來るから、其の拔くべからざる先天的遺傳性は暫く措

き、苟も狂愚不具者にあらざる限りは先づ自己の立脚地を定め徐ろに世に立つの準備として茲に常識の養成を努め、ます〳〵其の圓滿完全を計ることを急務とする。固より專門の學修は之を廢することは出來ない、否大に進んで之を研鑽し、刻一刻も止むことなき時代の進歩と文明の發展とに伴ひて、研究に研究を重ね、思索に思索を積みつゝ、益々向上を計らねばならぬのは勿論である。併し唯だ其の專門の學識のみを求めて常識の養成を顧みざる時は、折角の專門的學識も活用の途を誤り、若くは世に應用すること能はずして、空しく玉を抱いて草莽に隱れ、世に用ひられずして不遇を嘆ぜねばならぬ。彼の腐儒と稱する者は即ち之れで、一個の字引として存在するの外、全く活用の途

を知らざる死物であり、又た常識上の不具者である。されば吾等は專門學識の世に貴重なるを知ると共に、又た常識の養成の決して等閑に付すべきものでない事をも切言せねばならぬ。即ち常識は時代に必要なる智識であつて、現社會に於ける人間一切の行爲の標準となるものであるから、此の標準智識を缺乏しては暗中の模索と同じく、或は羅針盤を失へる船の如く、方向も航路も知るに由なくして其の危險計るべからざるものがある。故に常識は人間社會の基礎的智識で、其の專門學識も此の基礎の上に建てられなければ何等の効力もなく、空しく不具者たるに終るのみである。

既に屢次述べたる如く、常識は單に智的方面のみではなく、更に情的

方面、意的方面をも兼ねて、能く人の人たる所以を理解せしむる所に其の價値を有つてゐる。而して專門的學識は或る一部の特別智識であるに對し、常識は全般に亘れる普遍的智能であるから、此の普遍的智能の基礎の上に立つてこそ特別智識も其の光輝を發ち得るのである。併し今日の特別智識は將來の常識となり、今日の常識は過去の特別智識の蓄積であると共に、今日の常識の上に更に特別智識を建設してこそ、ます〳〵人智の進歩社會の發展を期し得るのである。即ち蒸汽機械の發明は其の當時に於ける特別智識であり、電信電話も、汽車も汽船も、皆其の當時の特別智識であつたが、其の次期の時代に於ては此等は既に常識となり、更に無線電信、無線電話、無線軌道、飛行機、

潜航艇などの特別智識の建設となり、今や此等の特別智識も亦た皆常識たらんとしつゝあるが如く、地球を以て圓形なりとせる特別智識は既に業に萬人の認むる所の常識となり、太陽が東より出でて西に入るは、太陽の運行ではなくして地球の廻轉であるとの特別智識は、又た既に萬人の認むる所の常識となつてゐる。然るに若し今日も尙ほ地球の圓形を信せずして平板說を抱き、或は地球の廻轉を知らずして太陽の運行を信ずる者があれば、夫れは學識に背くと共に又た常識に背く所の『妄識』である。即ち妄識は萬人の認めて不正とする所のものである。故に斯る妄識者の行爲は必ずや常規を脫して危害を社會に及ぼし、軌道を外れて害毒を天下に流すことは枚擧するに遑がない。例へ

ば『蒔かぬ種子は生えぬ』と言へる常識を逸する者は、種子も蒔かずに花實を望まんとする『妄想』に陷り、其の妄想は即がて『種子を蒔かずとも生える』と言ふ妄識を抱いて平然たるやうになるのである。故に働かずして甘味い物を食はうと思ひ、勉強せずして及第したいと思ひ、水呑み百姓でありながら一躍して大臣宰相たり得べく妄想し、其の妄識が禍して此の妄想の是非善惡を判別すべき常識を逸脫しつゝ遂には不勉強の爲めに試驗場に於て奸策を用ひ、勞せざるが爲めに他人の金品を無斷借用して衣食の費に充つるなどの竊盜罪を犯す者があるのである。實に寒心すべきの極ではあるまいか。

若し夫れ斯る罪惡を招く所の妄想にあらざる妄想でも、凡そ妄想と名の付くものは皆悉く有害無益で、其の思索は一として徒勞架空ならぬものはない。之れと同じく妄識は常識を外づれたもので、世界萬人の認めて不正誤謬なりとする所であるから、其の妄識者の行爲は又た妄想者の行爲と相似て、不正不善のものたるは論ずる迄もないのである。されば其の妄想を放擲し妄識を破棄して常規に據り常道を踏まんが爲めには、必ずや常識の養成を急務とし、其の常識の上に立つて現代の人たるべき資格を作らねばならぬ。彼の專門的學識たる特別智識も、此の常識の上に建設したるものでなければ其の功を見ることが出來ないのであるから、假令如何なる業務に就き、如何なる學藝を修むる者にせよ、苟も現代の人たる以上は、其の現代文明の反映たる常識

を先づ修得するの必要あるは無論であるが、偖て彼の特別智識たる學識、及び此の普遍的なる常識と共に、又た『見識』なるものがある。此の見識に就ては前に常識と心理狀態との關係に於て述べたやうに、實驗より歸納したる推理と思索達觀の力とに依つて、人世百般の事物を未然に洞察し、以て世を救ひ人を導くのが即ち見識で、其の達觀洞察の範圍程度の差に依つて、又た見識の高低大小の別はあるが、併し此の見識と雖も亦た當然常識を基礎として其の上に立つものでなければ、却つて世を迷はし人を賊ふの妄見たるを免れぬ。然るに世には學識あつても見識のない人があり、或は見識があつても學識のない人がある。其の學識あつて見識のない人は、徒らに書籍の藥籠中のものとなり、其の書籍以外に超越する能はずして、自己研究範圍の學說のみに拘泥し束縛せられて、到底一新機軸を出すの達識なく、僅に舊說を墨守するに過ぎぬから、日進月歩の社會を指導し、人智啓發の重任を全うすることは望み得られぬのである。若し夫れ見識あつて學識なき者に至つては、徒らに大言壯語の弊に陷り、其の大言壯語は基礎の薄弱なるが爲めに空見空識となり、却つて世を害し人を惑はすものである。されば吾等の望む所は學識見識併せ得たるの人でなければならぬ併し斯の如きは悉く之を萬人に需むることの至難なりとせば、必ずや先づ其の基礎たる常識の養成を期待せねばならぬ。

そも〳〵吾等が國家社會に對しての最も必要なる資格は、萬人皆悉

く英雄豪傑たることでもなく、又た固より萬人凡愚を以て甘んずべきものでもなく、實に圓滿なる常識を保持して國家社會の中堅たることにある。凡そ國家の進運社會の發達は、其の中堅たる國民、換言すれば中等程度の國民の能力努力に待つ所が最も多く、有らゆる發明發見でも、殖産興業でも、教育宗教でも、學術言論でも、之を上流貴族に待ち、或は之を下流勞働者に待つよりも、其の中心は常に中流社會に存し其の標準は必ず中等國民の能力に置かねばならぬから、一國々民の善良なる資格は即ち之れが中堅として其の國家社會の進運發達に貢献する所最も多きものでなければならぬ。或は個人としては英雄もあり豪傑もあり偉人もあらうが、之れは萬人を通じての資格ではない

即ち萬人を通じての資格は常識の完全なる發達を遂げたる圓滿なる人物でなければならぬ』。

此の圓滿は即ち又た人と人とを調和し、個人と社會とを調和するもので、斯くて人類の共同生活を調和し、其の向上進歩を促すものである から、圓滿と調和は人世の理想たるべきものである。そも〳〵圓滿には缺陷がなく、調和には不合理がない。故に宇宙は調和の理法に依りて無限無窮に渾然として融合せられ、社會の共同の生活に依りて圓滿に組成せられつゝ益々發達進歩の境に向ふのである。而して個人は此の渾然融合せられたる宇宙の一部分たると同時に、其の圓滿に組成せられたる社會の一員である。斯くて社會は個人の衆團に依つて成るも、

個人の生存は社會に依つて初めて完備せらるゝものであるから、離群索居して幽谷に遁棲し、全く孤立の境涯を求めたならば、到底其の生命を維持することが出來ない。其の着る所の衣物、其の住む所の家屋其の食ふ所の米粟は、皆悉く自己一人の力の及ぶ所ではない。殊に人の人たる所以は唯だ其の衣食住に依つて露命を繋ぐのみではない。其の眼を開き手足を動かして僅に生きてゐると言ふのみが人生の意義ではない。人生をして意義あらしむるものは實に其の精神上の働きでなければならぬ。されば社會を離れて生存する能はざる以上は、即ち共同生活の恩惠に浴して露命を繋ぐと共に、更に精神的に其の共同生活たる社會に向つて貢献する所がなければならぬ。是に於て他を利

し人を益し、公共の福利に對して自己の心身を捧ぐることを要する。之れ翻て又た自己の福利として循環し來る所のものである。若し夫れ他より利益を享受しながら、他に向つて何等の貢献する所がないならば、开は自他調和の律に反し、共同生活の理に背くものである。元來調和と言ひ共同と言ふは、自他互に相助け相補ふて初めて成立するものであるから、即ち人と人との調和を完うし、共同生活を圓滿ならしむる爲めには、此處に道德の大綱に待つを要する。仁義と言ひ、博愛と言ひ、禮讓と言ひ、慈悲と言ふもの、其の名は異なるとも其の實は一に歸して道德の根柢となり、此の根柢は宇宙の大道に基いて、人道の本義たるものである。更に此の道德を分類すれば個人道德

となり、社會道德となり、國民道德となるも、要するに自他の調和と共同の圓滿を計るを目的とするにあるは同一である。而して此の圓滿調和、換言すれば安寧幸福を計るの目的に向つて最も必要なるは『利他』である。即ち自己を主とせずして他を主とし、利己を顧みずして他人を利することにある。此の利他には積極と消極の二方面があつて積極的には福利を他に施し、消極的には害惡を他に與へさるにある。故に害惡を他に與へず不利を他に蒙らしめざらんが爲めには、自己の操守する所が堅實で、非を防ぎ、惡を去り、分を守り、獨を愼み、規律を嚴にし、秩序を正し、以て他を犯さゞるにある。猶ほ青山碧海の各々其の守る所を持して相犯さゞるが如きものがなければならぬ。更

に積極的に福利を他に施さんが爲めには、自己の一擧一動毎に人を益せんことを計り、博愛、仁慈、親睦、協和、同情、救濟、信義、敬重を以て他に接せねばならぬ。猶ほ日月の萬物を光照し、雨露の草木を霑すが如きものあつて、初めて積極的に他を利し得ると共に、又た消極的に他を犯すことなくして、此處に社會の共同生活に對し多大の貢献を爲し得るのであるが、之れぞ即ち宇宙の理法、天地の大道に基づける圓滿調和に一致すべき人生の本務である。

斯の如く天地宇宙の圓滿調和の理法に遵ひて、社會共同生活の福利を完全ならしむるの道義は、時間的に空間的に古今東西を通じて斷えず行はるればこそ、社會國家の安寧秩序を保ちつゝ益々其の進歩を見

る所以であるから、其の今日の文明あるは實に吾等の祖先が吾等に遺せる恩德に外ならぬ。されば現在の吾等は一面に於て祖先の遺德に報ひ、一面に於て惠澤を後代に傳へねばならぬ。斯くて社會は愈々善美にして、又た益々完全なる發達進歩を遂げ得るので、其處に向上の理想を實現することが出來る。是れ即ち人生の本義を徹底すべき當然の任務である。されば吾等は必然來るべき死を豫想しつゝ唯だ生きんが爲めに生きてゐるのではない、實に道を行はんが爲めに生きてゐるのである。唯だ生きんが爲めに生きてゐることは禽獸も尙ほ且つ之を能くするのであるから、靈異なる精神的人生に於ては殆んど無意義と言はねばならぬ。即ち宇宙の理法天地の大道を體現して茲に人道を行は

んが爲めに生きてこそ、人生の眞義に適合し、天地の化育を實行し得られるのである。看よ人は一個の小天地であり一個の小宇宙ではないか。五尺の形體は塵埃の微にだも若かぬが、精神上の作用は宇宙の間に充滿するのである。百年の壽は體軀の最終を告ぐるも、人格の不滅は天地の無窮と一致する。されば生死は素と關する所でない。生きて道を行ふべくんば則ち生き、死して道を行ふべくんば則ち死すとも亦た可なりである。唯だ道を行ふ能はずして死し、死して後代に益する所なきは、實に恥づべきの極みではないか。

併しながら此の道を行ふにも幾多の障害があり、幾回の蹉跎があつて事と心と違ふ場合が甚だ多いのである。即ち先づ自己の生存の爲めに

其の心身を勞し、激甚なる競爭の渦中にあつて或は病魔の侵す所となるの時、自己の一身既に支へ難きに、如何でか全人格を發揮して修養の理想を實現することが出來やう。而かも紅顏忽ち變じて白頭となり老境日に迫つて精力刻々に衰へ、蜉蝣の生命に似たる束の間にも、尙ほ鴨川の水、雙六の賽ならねど、我が意に違ふ事物の數々に遮ぎられ有らゆる難業苦業に鬪ひ疲れて、天地の神秘に觸れたる無限の靈能も宇宙の理法に合致せる絕大の理想も、我が現實の障碍に束縛せられて自在の靈力を掣肘せられ、圓滿なる眞善美の妙境に到達すべき高尙の理法を抱きつゝも、憐れ虛僞醜惡の現實に囚はれて呻吟懊惱する者の多きは、洵に悲むべき人生の半面と言はねばならぬ。併しながら其の

現實の虛僞醜惡は自から招く所のものならざる以上は、好んで之を懊惱するも無益の事で、其の悲喜苦樂は皆自己の心に出づるのであるから、修めて之を除き、養うて之を轉ずるは難事ではない。由來人心は素と圓滿、社會は素と缺陷、吾等は宜しく圓滿なる人心を以て缺陷なる社會を補ふべく、決して缺陷の社會に依つて圓滿なる人心を損せられざるべく其の修養を積まねばならぬ。

固より人體は宇宙の大に比ぶれば甚だ小である。即ち小は小であるが其の小は繫つて其の大を離れない。固より人壽は天地の悠久に比ぶれば唯だ一刹那の短さである。即ち短は短であるが、其の短は繫つて其の悠久と結びつゝある、殊に精神の範圍は空間的に宇宙の大に一致し

時間的に天地の悠久と終始するから、人體の小、人壽の短の如きは、又た必ずしも其の念頭に懸くるに足らぬものである。彼の長へに動かぬものと見られたる泰山も、萬古に變りなしと言はれたる海洋も、其の實は時々刻々の間に變易し、吾等が棲める地球も、眼界に映ずる天體も、亦た皆變易の同一圏内に轉々しつゝあるを知らば、有爲轉變の世の中も、無常の風吹く人生も、左まで悲哀の種とすべきではなからうと思はれる。殊に此等の變易轉化は唯だ其の皮相に止まり、深く異中に同を求め、變易の中に不變あるを見て、宇宙の萬象を一貫せる一體不變の理法を洞觀すれば、更に釋然として天人合一の大道を悟り得るに於て、又た何をか悲み何をか憂へんやである。即ち春は萠え冬は

枯るゝ野邊の草も、其の萠ゆると見、枯るゝと見たるは唯だ假想の現象で、之れが本體たる草其の物は不生不滅である。されば生と言ひ死と言ふも、其の本體には何等の變化あるのではない、唯だ吾等の眼に映ずる所の變化の現象と、森羅萬象の個々別々の異相とは、恰も海水の波瀾と同じく、千・波萬波の起伏するに連れて、或は怒濤あり、或は激浪あり、時には泡沫となつて消ゆるあり、細漣となつて岸の邊に寄するあり、或は靜なること鏡の如く、拭へるにも似たる海面に艪を押し破るさへ惜まるゝこともあるが、其の本體たる水は不生不滅で、其の生滅の相は唯だ波の變化に過ぎぬ。故に宇宙の現象は千狀萬態であつても、其の本體より言へば同一である。即ち『我』と言へば唯だ一

人で、天地の間に『我』と同じきものは外にはないが、『人』と言へば世界の人は皆同一である。されば同一の人が別個の我たり、別箇の我は又た同一の人である。此の意味に於て幾多の禽獸も動物であり、櫻桃梨李も松柏杉檜も植物であり、其の動植物は生物であり、金石土砂は非生物であるが、生物非生物共に物であると言ふに至つて、天地は平等、宇宙は一體、其の一體に個々の差別の象を具へ、一は即ち多、多は即ち一、變化の假相の奥には不變の本體があり、不變の本體の表には變化の假相があるこそ、眞に宇宙の妙趣ではないか。此の妙趣を看取すれば我と物と何の異なる所もなく、我が身微小なりと雖も宇宙と其の體を共にし、我が命短なりと雖も天地の悠久と其の一部を同う

するのみならず、我が精神は宇宙に滿ち天地を窮むるものであるから吾等が一擧一動は精神的に全宇宙に影響し、吾等の存否は精神的に天地の完不完に關する譯である。

されば宇宙の現象は、空間的に個々別々であり、時間的に變化生滅あるも、宇宙の本體は、空間的に平等一如であり、時間的に永劫不變である。故に宇宙の本體の一部を成せる吾等は、空間的に無限の宇宙の一部を占め、時間的に悠久の天地の連鎖となり、森羅萬象互に相關係して渾然一體を成すのである。斯くて異中に同あり、同中に異あり、變化の間に不變あり、不變の間に變化あり、千態萬狀悉く之を指示すべからずして、而かも之を貫くに不變の條理を以てし、秩序整然と

して一絲を亂さず、宇宙の大道は儼然として一點の私がない。斯る至公至平の大道に一致して人間の社會の進歩發達を期し、圓滿調和を計つて安寧幸福を求むるは、即ち吾等の理想である。

要するに宇宙と吾等との關係は全と分との關係で、分たる吾等の行動は全たる宇宙の目的に順應せんとするに外ならぬ。斯くて吾等は簡より煩に、單より複に、粗より密に、雜より精に、進化向上の大道を辿りつゝ年所を經て來たのである。故に人文發展の跡を顧みれば、時に盛衰興廢汚隆存亡の變轉はあつても、一段は一段より其の智識を進歩し、其の道念を向上し、順次に眞善美の境涯に近づきつゝ、宇宙の大道に一致するを理想としてゐるのである。否寧ろ此の理想を以て天地

宇宙と一體貫通せる吾等が本然の要求なりとし、此の要求の下に宇宙の大道の社會の上に顯現するを本務なりと信じてゐるのである。即ち誠は天の道で、之を誠にするは人の道であるから、至誠以て宇宙の眞髓に徹底し、至誠以て天地の理法に順適するは、是れ吾等が『道』を求むるの本諦で、又た道を行ふの要義であるが、此の道に依つて人と人との調和、共同生活の圓滿を得て、安寧幸福と進歩發達とを期するこそ、即ち宇宙の大道を社會の上に顯現する所の吾等の本務なりと言ふのである。

若し夫れ吾等は、社會を離れて孤立生活を營み得べくんば、宇宙の大道を社會の上に顯現して進化向上の爲めに努力し、天地の理法に順適

して安寧幸福を期すべき吾等の本務なるものを認むるの必要はないのである。併しながら前にも述べたる如く、人生を離れて社會なく、社會を離れて人生なく、個人の衆團に依つて社會を成し、又た社會を成さざれば個人の存在が出來ないのであるから、生を欲し死を厭ふの本能的慾望と、自己保存の必然的要求とに依り、茲に共同生活を營むに至つて初めて社會が成り立つのである。故に社會の成立は之を物質的より見れば則ち自己保存と種族保存の必要より起り、之を精神的より見れば倫理的に善と安全とを求め、審美的に美と愉快とを求め、智識的に眞と和衷を求むるに依つて起り、斯くて益々其の眞善美を發揮すべき理想に向つて進化發展を期しつゝ、原始時代の野蠻より次第に開

化文明の域に達して、尚ほ益々宇宙の大道、天地の理法に合致すべき妙境に到らんことを望める有樣である。

此の社會は其の始めに於ては唯だ僅に一部落の衆團であつて、父母兄弟姉妹及び其の近親たる同一血族のみの小團結に過ぎぬ。斯る小團結が東西南北に起つて各々生活に便利なる土地を選び、其の人口の益々增加するに從つて、更に便利なる土地を選びて移動するに至るのであるが、此の間に生存競爭を生じて優勝劣敗の理法が行はれ、同一血族の保存と發展との爲めに、他の異種族の膨脹に對する爭鬪と爲り、甲の部落と乙の部落と血を流して鎬を削り、優勝劣敗の結果として、强者は弱者を併呑し、小部落は大部落となり、小社會は大社會となり、

更に人口の增加と共に次第に膨脹を來して團結の鞏固を必要とし、遂に統率者あり指揮者あるに至つて、茲に統治機關を有し、上に君主あり下に人民あり、以て一定の領土を有して主權の下に統一せらるるの國家を組織するに至るのである。而かも國家成立の初に於ては、尙ほ重きを血族團體に置き、地方の分權は其の地方の族長に委ぬるの便利なるものがあつて、人民の職業は父子世襲の止むべからざるに出で、其の職業の種別に依つて權勢の多少を生じ、世襲の因習よりして家門に一定の資格を作り、此の資格權勢の差は遂に貴賤尊卑の階級を成すに至るのであるが、又た一方には各地方に於ける同血族の播衍ますます盛んにして、到底其一の地方を限つて之れが增殖に委ぬることの不

可能なるより、自然の勢として次第に近きより遠きに向つて分離移居するの止むを得ざるに至り、年所を經るの間に甲乙雜居し丙丁融合し遂に昔日の血族團體を變じて茲に地域團體を生じ、其地域に依りて結合するに至るのである。此に於て彼の族長の權力は既に失はれ、職業世襲の因習も亦た破れて、其の才能に任せ其の好む所に從ひて職業を擇び、其の職業上の利害關係よりして同一職業者の團結を生じ、或は商業社會、工業社會、農業社會、政治社會、教育社會、學者社會、新聞社會、宗教社會、官吏社會、學生社會と言ふやうに各種の社會を實現し來つて、其の社會毎に特殊の連絡を結び、精神的に規約的に各々特色を發揮しつゝ、共に俱に國家の範域に於て其の進步向上を計り、

仍て以て國家の隆運を期しつゝあるのである。唯だ學問は總ての社會を超越して天地宇宙の眞を窮め、經濟は國境を有せずして世界全般に其の有無を通じつゝ、斯くて益々發展進歩の理想境に到達するの近きにあらんことを翹望せざる者は無いのである。

斯くの如く社會は單純より複雜に趣き、一切進化の理法に遵つて發達しつゝある間に、分業の法行はれて生産者あり、分配者あり、被治者あり、統治者あり、茲に一定の領土を境して國家あるに至り、其の活動の必要上諸種の機關を生じ、其の機關も亦た益々複雜となるに至つて、遂に立法、行政、司法の三大分掌となり、國憲國法の制定となり政府あり議會あり、臣民の權利義務を明かにし、宗教あり教育あり、

以て社會的に國民的に教化を全うし、皆總べて君主の大權の下に億兆一心の美を濟しつゝ、其の國民的精神を發揮して國光を宣揚し、國運の隆盛を期し、天の大任を帶びて世界平和の保障に當り、至誠純潔の民性に依つて萬有包容融合し、絶大なる同化の力を以て一視同仁の實を擧げ、産業の發達と武德の威烈に依り、茲に富國强兵の美績を現はし、内は和衷協同輯睦一致し、外には仁慈德澤を施して化育綏撫の功を全うし、斯くて萬邦興廢の外に立ち、超然として列强盛衰の變遷に伍せず、天地と終始して無限の慶福を擔ひ、萬代不變、世界無比の國家を持續せんことは、實に吾等の理想であつて、而かも我が日本帝國のみ獨り世界に於て此の理想に適合しつゝあるこそ、洵に世界無比の

幸福と言はねばならぬ。

既に國家を組織して其の發展を計りつゝある以上は、固より國家の理想に向つて全力を傾注するは國民の本分であるが、此の本分を盡さんが爲めには、同時に社會の理想に向つても亦た全力を傾注せねばならぬ。何となれば國家と社會とは分離すべからざるもので、其の地域的に廣狹の別ありとも、素と同一體であるから、社會の一員たる我は即ち國家の臣民たる我である。故に社會を離れて國家なく、國家を離れて社會なく、唯だ其の制度の上に體形を異にし、治者被治者の關係に於て區別あるのみで、國家を表とすれば社會は裏であり、國家を經とすれば社會は緯であるに過ぎぬ。唯だ人間社會と言へる廣汎なる範圍

に於てのみ暫らく國家的色彩を脱するに止まるとは言へ、其の人間社會は一面には國家的社會の總稱たるかの如く、又た一面には國家的社會の一部なるかの如く、彼に廣く是に狹く、人間と言へる個人は世界十五億の唯だ一個人であると同時に、又た國家社會を超脱したる天人合一の廣汎なる意義に於て認められ、更に其の個人は社會の一員たり國家の一民たるに於て、公人とし良民として社會國家の一分子たるに止まるを見れば、其の人間社會は空間的時間に依つて廣狹二樣に解釋され得るのであるから、此の意味に於ても社會の理想は廣汎で、國家の理想は狹小であるとは言へず、國家の理想は高尚で、社會の理想は高尚ならずとも言へない。唯だ國家の理想には治者被治者の關係と、

國體政體の種別と、國民としての特性があつて、單に社會と汎稱するものに比ぶれば其の國家的色彩を帶ぶるに止まるの點に於て、廣汎なる意義の社會的理想と僅に色別あるを免れずとは言へ、既に一國を形成して其の國民たる以上は、單に廣汎なる意義の社會的理想を以て理想とするに止まらず、同時に其の國家的理想を理想とし、個人として完全なると共に又た國民として完全なる者でなければならぬ。白と黑と善と惡と言へる相反せる二種を同一物に兼ね修めて同時に其の兩者の極點に到達せんことは不可能であるが、國家と言ひ社會と言ふは固より同一體の表裏に過ぎずして等しく眞善美の極致に達せんとするに於て其の理想を一致してゐるから、國家的理想を理想とし、同時に社

會的理想を理想とするは、一面に白を理想とし、一面に黑を理想とするの反對理想を、同一物に兼ね修めよと言ふが如き不合理なるものではないから、何人と雖も其の修養に依つて個人として完全に又た國民として完全たり得るのである。

そも〳〵天地宇宙の活動と森羅萬象の狀態とは、終始一貫せられたる誠の大道に依つて支配せられ、進化の理法に遵つて益々善美の境域に近づきつゝあるに於て、眞善美の圓滿なる理想境に進まんことは、天地宇宙の自然であつて、宇宙の本體の一部、寧ろ其の本體の縮寫たる社會が、其の自然たる眞善美の圓滿を理想とするは當然で、更に社會の一員たる個人が、又た其の社會の理想を以て理想とするは固より其

の處であるから、個人の理想は社會の理想と一致し、社會の理想は宇宙の自然と一致せねばならぬ。されば理想の個人と言へるは此の理想を體現せる聖人君子で、理想の社會と言へるは又た其の眞善美の理想境に達したものである。理想の家庭、理想の人格、理想の商人、理想の學生、理想の官吏、理想の政治家、理想の軍人、理想の教育家など之を分類すれば數限りもないが、要するに學生は其の學生たるの本分に向つて眞善美の圓滿なる光輝を發揮し、教育者は其の教育者たるの本分に向つて眞善美の圓滿なる光輝を發揮して、初めて理想の學生たり、理想の教育者たり得るのである。商人も官吏も學者も政治家も亦た各々其の本分に向つて眞善美を發揮してこそ、即ち又た理想の商人

たり理想の官吏たり得るのである。而して其の『眞』は智識的情操で主觀的には信仰となり、客觀的には眞理の一致即ち至誠となり、其の『善』は倫理的道德的情操で、良心に依つて明覺する所のものであり其の『美』は審美的情操で、智識的道德的以外に視聽二覺より來る所の感情的である。文藝の根本は斯る審美的開展より發し、詩歌となり音樂となり繪畫となり彫刻となり、以て原始時代の粗野を變じて美的趣味を開發し、斯くて現代の雅美壯美優美を見るに至つたのである。又た其の智識的情操の信仰に於ては宗教となり、其の宗教は多神教より一神教に進み、萬有を本體とせる宇宙は即ち神で、客觀に神は眞理なり、眞理は至誠なり、至誠は即ち一なりと言ふやうに、現代に至つ

て思想の發展ます〳〵著しきを見るのである。其の道德的倫理的情操の『善』に於ても亦た次第に進歩し來り、父子骨肉の血族關係に依つて人倫五常の道早く起り、以て家族を規範し、社會漸く擴大するに及びて自他の關係益々繁く、交友の道起り、同情の念生じ、博愛信義恭敬禮讓に依つて、調和を計り、圓滿を保ち、國家漸く成るに及んで君臣の大義を生じ、忠君愛國、義勇奉公に依つて、秩序を保ち團結を固くし、更に社會と社會、國家と國家との交際となり、侵略併呑を事としたりし戰爭も、仁義の爲め平和の爲めに兇暴を膺懲するの戰爭となり、道德の範圍は益々廣く、其の本位は益々高く、遂に個人の義務に對して權利を認識せられ、自由獨立の思想と共に人格尊重の念起

り、宇宙の圓滿調和せる一貫の條理に基きて、社會は年と共に秩序あり平和なる理想に向つて進化の途上にあるのである。されば社會の理想は人類の最も高等なる欲求で、眞善美の鄕國に達せんが爲め、渾然たる宇宙の大調和に合一せんと欲するものである。而して此の大調和に合一せんが爲めには進化の理法に遵はねばならぬ。而して進化の理法には自然の淘汰が行はれ、斯くて生存に適する者は存續し進歩し、其の適せざる者は退歩し滅絕するのである。されば吾等は常に勉めて適者たらねばならぬ。即ち適者生存の理法に支配せられつゝある宇宙の間に處し、其の宇宙の縮圖たる社會に一員たるの位地を占めながら若し適者たるの資格を具へなければ、到底敗者たるを免かれずして、

遂に社會的に死の宣告を受けねばならぬ。されば若し現代文明の世界に處して其の文明の何たるを知らざる者が、果して現代の世界に適者たり得るであらうか。又た現代社會の一員たり現代國家の一民として其の社會國家の趨勢と實際的學術の進歩とに疎くして、果して其の社會國家の適者たり得るであらうか。即ち過去の不合理なる空談舊說に甘んじ、毫も進歩せる現代の科學的智識なからんには、奈何でか現代に適せる現代人なりと言ふことが出來やう。されば現代に於ける常識を具備する者でなければ、現代に處して適者として生存するの資格がないのである。既に其の資格がなくして何を以て更に社會の理想を望み得られやうか。何を以て健全なる思想、强固なる信念を以て向上進

歩の途に就き得られやうか。故に理想社會の發展を期しつゝ人生の本務を行はんとするには、必ず先づ現代科學を基礎とせる常識を有して以て現代社會の適者たる生活を營まねばならぬ。彼の科學的智識を根柢とせざる輕浮謬妄の俗識、妄識を以て我は適者と言ふ者の如きは固より一顧にだも値せぬのであるから、其の適者たらん者は又た其の心理狀態に於ても、宜しく心氣の雜駁散漫を避け、事に當つて全精神を傾注し、逸氣、戾氣、亢氣、衒氣、惚氣、暴氣、血氣、客氣、惰氣、凝氣に傾かず、常に張氣に依つて事物を助長し、敢て或は非常識なる剋殺破壞の擧に出でず、又た架空の妄想に追はれず、進むには剛邁勇健、守るには堅忍自彊、一に至誠を以て事に當るならば、必ずや其の

成功は期して待つべきである。從つて理想境に達せんこと亦た敢て難きにあらざるべきを信ずる。

五、處世の常識

凡そ吾等が此の世に處するの道は、一言にして之を盡せば『善を行ひて不善を爲すべからず』と言ふに歸する。是れ實に簡單にして何人も實行し得易きが如く考へらるゝも、其の實は頗る複雜にして而かも甚だ行ひ易からざる難事である。故に社會に虛僞あり、詐謀あり、奸曲あり、不正あり、人に貪慾あり、暴戾あり、憤恚あり、怠慢あり、驕傲あり、不孝あり、不忠あり、不悌あり、殘酷あり、浮薄ある所以で、

是れが爲めに性の善惡に關する學說は、古往今來尙ほ未だ一定せざる譯であるが、而かも其の善惡の標準は倫理道德の中心概念で、其の善に關する思想を分類すれば、則ち現實の要求の善と理想の追求の善とに二大別することが出來る。其の現實の要求の善とは、社會の幸福を計るの行爲で、理想の追求の善とは、良心の滿足である。此の良心の滿足の善は動機に依つて定め、社會の幸福を計るの善は其の結果に依つて定めるのである。

併しながら善と言ふは何う言ふものであるか、惡と言ふは何う言ふものであるか、之れが定まらなければ善を行ひて惡を爲すべからずと言つた所で、其の善も其の惡も標準が判らぬから、恰も五里霧中に彷徨

ふのと同じで、何れを東、何れを西とも見當が付かぬのである。普通一般には人に物を惠むと言ふことが善行であると極められてゐる。如何にも善行であつて惡行ではないが、若し國家の存亡興廢を賭して戰爭を爲しつゝある場合に、人に物を惠むのは如何に善行であればとて味方の糧食彈藥を以て敵軍に與へたとすれば何うであらう。夫れが善行と言はれるであらうか。或は又た人を殺すのは惡行たるに相違ないが、同じく戰爭の場合に人を殺すのは惡行であるからと言つて、悉く敵兵を助けて遣つたとすれば、夫れは善行と言はれるであらうか何うか。斯う言ふ風に善と惡とは時と場合に依つて變るものとすれば、其處に一定の標準がないから、其の善惡を決定し判斷することが出來ぬ。

昔は日本では耶蘇敎を嚴禁して、之を犯した者は刑罰に處せられたが今は信敎の自由を得て之を奉ずるも法律には問はれない。其の耶蘇敎に變りはないのに昔は信者を罰し今は其の自由を許すのは、昔の惡とする所を今は善とするのである。曾我兄弟は十八年の艱苦を嘗めて親の敵を討ち、世に稀なる孝子として喧傳されてゐるが、現代の日本では其の心を憐みて其の行を罰し、殺人犯として其の罪を問はねばならぬ。然らば則ち昔の善とする所は今の惡とする所である。西洋では立食の禮があるが、日本では立ち食ひを以て無禮としてゐる。即ち日本で無禮とする所を西洋では禮としてゐるのである。恰も旱魃に際して百姓の喜ぶ雨は、航海者の厭ふ所の雨であり、東に向はんとする甲者

の爲めの順風は、西に向はんとする乙者の爲めの逆風であるやうに、時と所とに依つて善となり惡となるから、善とは果して何んなものか惡とは果して何んなものか、少しも判斷が付かぬのである。其處で東西の學者が昔から此の問題に就て盛んに議論を戦はしてゐるが、其の議論は要する所二つに別れる。一は結果論、一は動機論である。其の結果論と言ふのは、行爲の結果を見て善惡を決めるので、其の動機論と言ふのは、將に行はんとするに當つて自己の心に善と思へば行ひ惡と思へば行はぬと言ふのである。故に結果論から見れば、其の結果は善であつても其の動機は必ずしも善であるとは限らぬ。之を動機論から見れば、其の動機は善であつても其の結果は必ずしも善であるとは

限らぬ。彼の曾我兄弟の敵討は、今日に於ては其の結果は殺人犯であるが其の動機は孝心より出でし所の善である。醫師の誤診に依つて全治すべき病人が死んだとすれば、其の結果は惡であるが、醫師の動機は之を全治せしめやうと言ふ善であるに相違ない。慾の深い老婆が其の相續人たる息子を虐めんが爲め、碌々食物も與へず衣物も着せず、客嗇に客嗇を重ねたのであるが、老婆の死後其の息子が承け繼いだ遺産は客嗇の爲めに數萬金に上つてゐた。即ち息子を虐めると言ふ動機は惡いが、其の結果たる遺産は息子の爲めに善である。斯う言ふ譯であるから、結果論では其の結果を見て善惡を定めるとは言ふものゝ、其の結果が果して善であるか惡であるかは、之を行はん

とする初めに於て豫測することが出來ない。豫測することが出來なければ、假令善を爲し惡を爲すべからずと言つた所で如何とも仕方がない。其處で自分の心に問ふて善と思つたのが善、惡と考へたのが惡と決めるより外はないから、即ち動機論が起る譯であるが、併し自分が善と思つた事は果して善で、惡と考へたのが果して惡であるか何うか其の動機の善に從つて其の結果も善、其の動機の惡に從つて其の結果も惡であるか何うか、朋友に責むるに善を以てして却つて反對に絶交の結果を見ることがあり、他人の放蕩息子に忠告して反抗心を起させ却つて益々其の放蕩の募るに至つた例などは世間に甚だ多いのである此等は動機の善を以てして結果の惡を招いたもので、即ち動機の善惡

に依つて必ずしも結果の善惡を豫測することの出來ないことが知られる。されば吾等の心は甚だ不完全で、之を善とし之を惡として明確に定めることは困難と言はねばならぬ。

既に吾等の心は不完全であることが知られた。併し其の不完全の儘に放任して善惡の差別を誤らしむることが出來ないから、何うしても此の不完全なる心を完全ならしめねばならぬ。然らば何うして完全ならしめるかと言ふに、吾等の心を以て宇宙の大道たる理法即ち天地の道理に順はしめるより外はない。即ち道理に順つて起つた心は善、道理に背いて起つた心は惡であるから、其の善心に依つて行爲を判斷すれば善惡は忽ち分明する。換言すれば道理に順ふのが善、道理に背くの

が惡である。併し其の道理とは何んであるか、之れが辨らねば問題にならぬ。即ち道理とは天地自然の有りの儘の道理、宇宙に充滿しつゝある所の眞理で、『誠は天の道なり』と中庸に言つてある所の其の『誠』である。故に誠に順ふは善、誠に背くは惡であつて、此の誠を吾等の心に體したものが即ち良心である。斯くて良心の善とする所を行へば其の結果も善であり、良心の惡とする所を行へば其の結果も惡である。されば吾等は常に動機の善にして結果も亦た善なる行爲を取らねばならぬ、之を善行と言ふのであるが、此の善行は目的意識の活動に依るのである。凡そ天地宇宙間に於ける一切萬物の活動には、無意識的活動、意識的活動、目的意識的活動の三種がある。例へば赤子が母の胎内から出ると同時に聲を上げるのは無意識である。又た蠅取草が其の葉を卷き込んで蠅を取るのも無意識である。併し犬が餌を漁つて歩き鳥が東に飛び或は西に飛ぶのは、意識的活動である。動物は概ね意識的に活動してゐるが、更に百尺竿頭一歩を進むれば、茲に目的意識活動が起る。此の活動は自己の窮極の目的を意識して活動するもので、唯だ吾等人間に於てのみ存する所の最も高尚なる活動である。而して其の窮極の目的とは即ち宇宙の眞理天地の法則たる誠を理想として此の理想に到達せんとすることである。前に理想と常識に就て說いた通り、社會は宇宙の本體の一部分であつて、同時に宇宙の縮圖であり、吾等は其の縮圖たる社會の一員で又た宇宙の本體の一分子であるから

天地の法則に順ひ宇宙の大道に則つて活動することは人間の本務でなければならぬ。之を以て其の大道法則に一致せしむべく社會の向上發展を計るを目的とし、此の目的を意識して活動する所に人間の人間たる眞の價値があるのである。

斯の如く人生窮極の目的を意識して活動することは、己れを知る者でなければ出來ない。多くの人間の中には或は無意識に活動してゐる者もあり、又は目的意識なくして活動してゐる者もあるが、此等は己れを知らない者である。其の身を忘れた者である。其の身を忘れ己れを知らずして活動せる活動は危險であつて、如何なる禍害を其の身に及ぼし其の社會に及ぼすかも判らぬ。故に己れを知ると言ふことは道德

の第一歩であり智識の根柢である。而して此の己れを知ると言ふことは即ち『自覺』であつて、社會の一員たるを自覺し、宇宙の一分子たるを自覺し、國家の一民たるを自覺し、人間の人間たるを自覺し、若くは親に對して子たるを自覺し、君に對して臣たるを自覺し、鄕黨に對して先輩たるを自覺し、社會に對して學生たるを自覺することが、即ち己れを知るのである。己れを知つて始めて人生の本務を自覺するのであるが、自覺には當然責任が伴ふ。唯だ自覺した計りでは其の責任が果されぬ、即ち學生たるを自覺すれば、同時に其の責任を果さねばならぬ、夫れが學生の本務である。先輩たるを自覺すれば、同時に後進を誘導せねばならぬ、夫れが先輩の責任で又た本務である。更に

此等を綜合して人間の人間たるを自覺すれば、同時に人間たるの責任を果さねばならぬ、夫れが人生の本務である。

此の己れを知ること即ち自覺は、何うすれば自覺せらるゝかと言ふに智識の啓發に待たねばならぬ。善と惡とを意識判別して誤謬なき所に正しき自覺を得るのであるから、智識の啓發に待たねば人生の本務を自覺することが出來ない。故に個人的には智識を整理し智能を啓發し社會的には世態に通曉し智識を應用せねばならぬ。常識の養成は實に此の點に於て必要を認める。併しながら智識のみを以ては冷靜なる理性のみに馳せて、道德的行爲の溫情を缺くから、圓滿に萬事を處理することが出來ない。其處で理性に加ふるに人情を以てせねばならぬ。

即ち個人的には趣味の涵養と發展、社會的には寬容の德量と同情の發揮とを要する。併し未だ之れでも完全ではない、此等智德の外に更に意志の鍛錬を要する。意志の鍛錬とは勇を養ふことで、善の動機があつても之を遂行するの勇がなく、惡と知りつゝ之を去ることの出來ないやうな薄志弱行では、到底世に立つて人生の本務を行ふことが出來ないから、個人的には精力の蘊蓄、克己自制の修練、社會的には堅忍不拔の精神、不撓不屈の努力を要する。以上智情意の三方面は即ち謂ゆる天下の達德たる智仁勇の三德であつて、明敏なる觀察と沈重なる思慮とは其の智に屬し、博愛仁慈の德と秩序規律の遵守とは其の仁即ち情に屬し、向上奮進と堅忍不拔とは其の勇即ち意に屬し、此等三德

三方面の圓滿なる修養に依つて、初めて動機も善ならしめ結果も亦た善ならしめ、斯くて宇宙の大道を體現するに偉大の力を與ふることが出來る。然るに迷妄愚痴なるものは明敏なる觀察を妨げ、心の散亂動搖する者は沈重なる思慮を妨げ、我慾慳貪は博愛仁慈を妨げ、放縱破戒の心は秩序規律の遵守を妨げ、柔惰懈怠の心は勇奮向上の進取を妨げ、卑屈瞋恚の心は堅忍不拔の精神を妨ぐるもので、其の迷妄愚痴と散亂動搖とは『痴』に基づき、我慾慳貪と放縱破戒とは『貪』に基づき、柔惰懈怠と卑屈瞋恚とは『瞋』に基づく。此の痴貪瞋の三毒は智仁勇の三德を蔽ひて其の明光を害する所の迷霧であつて、人生の本務を遂行するの前程に横はれる黑雲であるから、之れが爲めに其の方向

を誤つて懊惱し、岐路に迷ひて遲疑する所以である。宜しく此等の迷霧黑雲を取り除いて人間共同生活の美を發揮し、社會進步發展の實を擧げんこと、是れ即ち道義の根柢である。

既に人生の本務を知り、又た此の本務を遂行せんが爲めの道義の根柢を了解すれば、吾等は全力を擧げて現實社會の爲めに努力するを要し其の努力は常に道德の範圍に於て人と人との調和圓滿を計りつゝ、以て利用厚生の途を講ぜねばならぬ。是れ即ち處世の方針である。然るに世には一種の超然主義を取つて山谷の間に閑居するを喜ぶ者がある其の言ふ所に據れば、人と人との調和に成れる道德は塵界の俗事である。人と人以上の實在たる宇宙の大道と調和せざれば、天人合一の根

本義に接觸することは出來ぬ。即ち俗塵を超脱して始めて之れに接觸し得るのであると。斯う言ふ見解よりして獨り山谷の間に幽居し、以て其の心境を清淨ならしむるを樂む者がある。併しながら社會は到底俗塵である、俗塵であるから之を理想の境に進むべく努力するこそ人類生存の本義で、進化の理法に基づき向上發展を期しつゝあるは人生の本務である。斯くて人と人以上の實在たる宇宙の大道と調和すべき社會の實現を理想とし、此の理想に達せんが爲めの徑路として先づ人と人との調和に成れる道德を階段とするのであるから、社會を離れて其の理想を實現せんことは、水を離れて魚の生を保ち得ざると同じく獨り山谷に幽居して超然生活を樂む者は、即ち社會的自殺に外ならぬ。

そも〳〵人生の目的が孤獨生活にあらざることは社會の成立に於て既に之れを證明してゐる。故に社會を塵界なりとして自己一人を潔ふせんことは、社會の成立を無視し、人生の目的に背反するものであるから、人と人との調和以上に、天人合一の根本義に密觸せんとすればする程、其の塵界たる社會を進展せしめて、益々理想の境に到達せしむべく努力するこそ人生の本務でなければならぬ。塵界であるから之を避け、俗社會であるから之を脱すると言ふに至つては、人類生存の本義を沒却したる社會的自殺者でなうて何であらう。殊に其の塵界を脱し得たりと思惟する山間幽谷と雖も同じく俗社會の渦中であるから、兼好法師も『こゝも亦た浮世なりけり外ながら思ひしまゝの山里もがな』

と嘆じた譯で、彼の計由が耳を洗つて俗言の汚れを淨めても、夫れが社會に何の利益も與へぬ。其の耳を洗ふの清き心を以て社會の俗塵に處すればこそ、人生の本務を全うし得られるのであるから、水戸黄門が許由の圖に題して、『耳を洗ふ心の水は清けれど流れは汲まじ世を救ふ身は』と言つたのは、實に人生の本務を說き得て遺憾なしと言ふべきである。されば超然主義を取つて己れ獨りを清うする者は死道德者であつて、活社會に何等の寸功をも與へぬから、死道德の道德は之を道德と言ふことは出來ない。即ち道德は社會を離れて存在するものではない。殊に宇宙の大道に合致すべき理想に至つては、尙更ら社會を離れて意義あるものたらしむることは出來ないのであるから、吾等が

尊重する所のものは實に活ける道德である。意義ある理想ある。活ける道德は活ける社會に處して活動する根源の力であつて、利他博愛以て共同生活を助け、仁義禮讓以て安寧幸福を增進し、斯くて社會の進步發展に貢獻してこそ、其處に道德の眞價があるのである。されば眞の道德は現實の社會を離れては之を行ふに處がない。故に殖産興業勤儉致富の利用厚生の道も、常に道德と終始して以て其の實を全うすることが出來るから、道德は社會を灌漑して精神的に物質的に其の收穫を多からしむる所の用水の源泉で、謂ゆる混々として晝夜を舍てず、流れては谷川の水となり、合しては滔々たる大河となり、遂には四海に溢るに至つて、其の用ます〳〵多く、其の功いよ〳〵大な

るものがあるのである。昔は仁義道徳と利用厚生とを以て全く其の趣を異にするものと考へ、眞の道徳は現實の社會を脱して始めて存在すると思惟してゐたのであるが、斯る迷想は今日に於ては一顧の價値もなきものとなつた。何となれば現實の社會に行ひ得てこそ眞の道徳で社會を離れて其處に何等の道徳も存在するものではないから、利用厚生は又た道徳に待つて始めて其の實を全うすることが出來るのである之を衣食住の上に見ても、其の衣食住に缺くべからざる物品若くは財貨に對し、自他互に其の利を爭ひて飽くを知らず、餓虎豺狼の貪慾を專らにして、世は擧げて修羅の巷と化し、他を排して己を利するならば、社會は到底滅亡するの外はない。即ち此の滅亡を未然に防ぎて、益々向上進歩の途を開き、其の利用厚生をして眞に社會發展の基たらしめんには、彼の餓虎豺狼の貪慾を制して、利他博愛、仁義禮讓、規律嚴正、恭敬廉直、堅忍自彊、守分節制、勤儉力行の如き仁義道徳に據らねばならぬ。されば目前に利を爭ひて權勢に阿るものは不義に陷り、不義の榮華は浮べる雲の如く、一時に誇り榮ゆと雖も、遂に永久の破滅たるを失はず。永久の利を思ひて道徳を守る者は、一時は人目を眩惑するの榮華の夢なきも、遂に萬古に赫灼の光りを發つものである。是れぞ即ち活ける道徳の絶大無窮の光明で、利用厚生は此の道徳の光明に依つて其の眞價を發揮し、仁義道徳は利用厚生の發達に伴ふて益々其の大を致す譯であるから、吾等は宜しく活道徳を提げて活社

會に立ち、俗塵の渦中にあつて其の俗塵を清掃すべく大に活動すべき筈のものである。

此の活動を爲さんとせば、吾等は先づ吾等の獨立生計を營まねばならぬ。自己の生計を營み得ずして他人の助力を仰ぎ、一家を經營する能はずして四方に漂浪しながら、活道德を口にし大活動を說けばとて、之を實行するを得ざるに於ては、奈何でか社會の共同生活を助け其の進步發展に貢獻することが出來やう。世には病弱にして其の志を行ふ能はざるものもあり、米鹽に窮乏して他人の扶助の下に露命を繫ぐ者もある。其の病弱其の窮乏は一時の災厄の爲めで、自ら求めず自から招かぬものであるならば、之れが恢復は期して待つべきであるが、

平素の攝生其の宜しきを得ず、平素の心懸け其の當を得ざるが爲めの病弱窮乏ならば、亦は到底救濟の途なきのみならず、社會に對する一種の不德であるから、自から不德にして而かも社會に道德を行はんことは、步まずして遠きに到らんことを望むと一般である。

然るに世には斯る窮乏と清貧とを混同して考へる者がある。窮乏の極他人の扶助を仰ぐは不德であるが、一簞の食一瓢の飲に甘んじて清貧に居ることは不德ではない。不德ではないが褒むべき事ではない。尤も他人の利益を奪ひて私腹を肥し、社會を欺罔して不義の榮華に耽る者に比ぶれば、其の高潔の心事は激賞するに餘りあるが、清貧其の物は社會の爲めに何等の用を爲すものでない。元來清貧に甘んずるは自

己を本位としたもので、社會に對する利害を念頭に置かず、自から潔うするのみを以て快しとするのであるから、負債山の如く積みて累を他に及ぼす所の惡貧若くは濁貧―然う言ふ詞があるならば―其の惡貧が社會に流す所の害惡の如きものは淸貧には無いのであるが、害惡は無いから社會に利益を及ぼすとは言へない。願くは自己を本位として自から潔うするのみを以て足れりとせず、更に社會を本位として社會の爲めに貢献すべく努力し、大に利用厚生の道を講じて活動せんことを望まねばならぬ。是れぞ人生の本務であるから、何を苦みて淸貧に甘んずるの消極的退嬰的生活を敢てし、又た何を苦みて致富の境涯に達するの積極的進取的方法を講ぜざるか。

左は言へ淸貧を嘲つて豪奢を奬むるのでは決してない。又た致富の道は奢侈榮華を求むるが爲めの方法では決してない。利他の爲めに富を致し、社會の爲めに福を分つてこそ、其處に人生の本務があり價値があり美德があり光輝があるので、自己の慾望を擅にして他を顧みず奢侈を事とし榮華に耽るは社會を毒するものである。驕る平家は久しからず、羅馬の末路轉慘澹を極めたのは、皆社會を毒した結果である。苟も常識を備ふる者は、利他分福の美德と奢侈驕態の害毒とを判別するに苦む程の事がないから、之を判別する以上は其の美德に就きて其の害毒を除去すべきは勿論の事である。

自己の飽食を割いて他人と共に其の美を味ふことは美德ではあるまい

か。自己の衣服を頒つて他人と共に暖を取ることも亦た美德ではあるまいか。即ち自己の受け得たる幸福の幾分を割いて他人に頒ち與へ、他人をして自己と同じく幸福を共にせしむることは『分福』である。されば利他分福の美德に對して、利己專福の鄙吝たるは言ふ迄もないが、世には利己專福の人のみが多くて、利他分福の人の稀なるは何故であらう。夫れは畢竟するに『福を分つは福を得る所以である』と言ふ常識を缺乏するから招く所の弊害と言はねばならぬ。諺に『損して得取れ』と言ふのは稍此の分福を說き得たもので、眼前の損得から見れば福を分つは一時の利益を減損するやうでゐるが、其の減損は自己に對して何等の苦痛を與ふるものでなく、却つて他人をして自己と共

に幸福を同うせしむるの德がある。德は即ち得で、德を施す者は何時かは又た福運來向の得があるものである。

然るに世には大なる富を擁しながら、鄙吝の性癖の爲めに福を他人に分つを吝み、自己の憂は他人をして之を分たしむるも、其の喜びは自己一人にて專らにせんとする慳貪野鄙なる者がある。或は一步を進めて他人の幸福を奪ひ、他人の災禍を喜び、他人の困苦を外に視て、惡辣權謀の限りを盡し、譎詐欺罔を尋常茶飯の事とし、偏に我慾を計り不正の行爲を重ねて、不義の蓄財を爲す者もある。斯の如きは到底常識者の敢てし得ざる所で、其の不正不義の行爲は假りに法律の制裁を免かれ得るものとしても、道德上からは死刑の宣告を受くべき者であ

専福は失福を招く

る。斯る不義の惡漢と利己專福者とは固より同一に論ずべきものではないが、倒れぬ前の杖とやらで、利己主義者の爲めに頂門の一針を加へて置きたいのである。

近視眼的に言へば、福を他人に分與するよりも福を獨占した方が、自己の受くべき福の分量は多大なるには相違ない。併し自己一人で福を獨占しやうと言ふ心根は實に利己主義の極で、其の心根の吝貪野鄙にして狹猥なる情無さは、何とも言へぬ次第である。斯くても其の福なるものは精神的に眞の福であるか何うか甚だ疑はしい譯である。即ち其の福にして眞の福に非ざる福を享受したればとて、殆んど無福同樣で、識者の眼から見れば寧ろ憫れむべき悖德者と言はねばならぬ。假令社會の指彈を免かるゝとも、道德上の公明なる裁斷は、終に其の人をして其の僞福を失はしめずんば止まぬのである。斯くて利己專福の結果は、無福を通過して更に失福を齎すに終る。要するに福を分つを吝む者の心情は餓虎の夫れと比すべきもので、餓虎が其の餌を友に讓らざるは獸畜の已むを得ざる所であるが、人にして餓虎の如くんば、何處にか人の人たる性情があらう。己れを制して人に讓るは人間の崇高なる美性であつて、物質に足らざるも精神に足り、物慾に充たざるも心情に充ちて樂んでこそ、禽獸の上に立つて道德仁義を標榜する人間の價値ある所である。

分福の價値と其工夫

吾等は敢て多福を人に頒てと言ふのではない、頒ち得べくんば多々益

々可なりであるが、多福を願たんとを欲して、小福を願つを忘るゝを虞るものである。假令一瓶の酒でも一斤の肉でも、其の分福の量は少くとも、其の志は甚だ厚く、人をして大に感謝せしむるに足るものがある。其の感謝より生ずる影響の莫大なることは、常識を待たずとも自から明白であらう。古の名將が戰に勝つて其の福を專にするに忍びず、之を士卒に頒つて戰勝の樂を共にしたる寛洪仁慈の情懷は、高潔崇美洵に掬すべきものがあるではないか。斯くてこそ此の情懷に感動せられたる士卒は、又た共に其の憂を分ち、進んで將主の爲めに身命を擲つやうになるのである。豐臣太閤が微賤より身を起して早く天下を取り得たのは、實に此の分福の美德に依ることが多きに居るのである。即ち一國を得れば部下に數郡を頒ち、一郡を得れば部下に一城を與へ、一勇士にして萬石に封せられ、一將にして數十萬石を領せしめらる。如何ぞ太閤の爲めに犬馬の勞を惜まずして殊死奮戰せざるを得んやである。されば凡そ人の上たる者は必ずや福を分つの工夫がなければならぬ。雨露は草木を霑して美花を開かしめ、人は慈愛深き所に感激するものである。春風靄々和氣滿つるの時、祥光の氤氳たるあつて、誰か其の德化に服せざらんやである。若し夫れ愚將にして分福の工夫を知らず、鄙吝慳貪にして其の部下を愛せざらんか、誰か其の愚將の爲めに身命を捧ぐるを喜ぶ者があらう。殷の紂王、夏の桀王の其の終を全うせざるは之れが爲めである。殷鑑近きにあり、又た

禍福は如何にして招かるゝか

之を清朝の末路に於て觀るのである。

禍福は自から招くものであると昔から言はれてゐるが、如何にすれば其の禍を招き、如何にすれば其の福を招き得るのであるかと言ふに、答は頗る簡單である。即ち福を分つと分たざるとにある。其の分つべきの福は如何にして之を得たるかと言へば、自から責めて足らざるを補ひ、自から責めて他の同情を惹くにある。即ち他の同情を惹くは福を招く所以で、事業の成功は自己の力に依ると共に、更に他の同情を惹くに依るは自明の理である。其の成功は福の大なるもので、失敗は禍の大なるものである。古來の偉人傑士の傳記を繙けば、其の偉人傑士たる者は皆自から責むるの人で、決して人を責め人を怨む者でな

加何なるが是れ福を分つを能くする人

いことを見るであらう。之れに反して非運禍害を招ける人は、必ずや己れを責むるに薄くして、人を責め人を怨むの深きものあるを見るであらう。名將の百戰百勝を必し、愚將の一敗地に塗るは、又た己を責むると責めざると、人を怨むと怨まざるとに依る。禍福は是に於て岐れ、成功失敗は茲に基づくのである。

そも〳〵蒔かぬ種子は生えぬから、我れ能く人に福を分てば、人も亦た我に福を分つべく、假令我に福を分たずとも、我をして福あらしめんことを祈りつゝあるは問ふを待たぬ。例へば工場主が其の職工に對して福利を頒ち、地主が其の小作人に對して契約以外の所得を與へ、商店の主人が其の使用人を愛撫して利益の幾分を分與するならば、其

の職工も小作人も將た使用人も、自から奮つて業務に勉勵し、主人大切に骨身を惜まず、主人をして益々商利を得せしめ、收穫を多からしめ、製作品をして精巧に且つ多量ならしめんことを心に期するは勿論である。若し夫れ其の分福に狎れて主人の利害を思はず、却つて或は怠慢に流るゝ者あらば、亦は常識なきの愚劣の輩であつて、強ひて之を使用するの要はないから、須らく解雇すべきである。亦は兎もあれ一人の力は衆人の力の強きに及ばぬ。元利元就が協力一致の強きを說いて、一箭の折り易きも二箭の撓め難きを示してゐるが、智も亦た其の通りで、一人の智は衆人の智の大なるには若かぬ。固より衆愚の智は一賢人の智に及ばぬは此の場合を言ふのではない。されば衆人の力を協せ衆人の智を用ひて、其處に大業があり大功があり美事があり巨利があるので、假令其の事業の計畫は自己の立つる所で、其の資本は自己の供する所なるにもせよ、自己の限りある一人の力は、小事は偖て措き、大事大業に至つては到底能く成し得る所ではない。即ち天下を取つたのは豐臣大閤であるが、之を取らせたのは其の部下の働きである。故に大なる福を得んとする者は、必ず能く福を人に分ち、敢て自から其の福を專にせず、衆人之れが爲めに我に向つて多福ならんことを希ひ、其の力を協せて事に當るに及んで、我が得る所の福利は之を分つ所の福利に幾倍するものあるに至るのである。之を福を分つを能くする人と言ひ、同時に福を得るを能くする人と言ふべきである。

然るに人に福を分つを吝む者は、假令餓虎の貪婪はなくとも自己の懷中を暖むるに急に、落ちたる糞土さへ之を袂に投げ入れて其の膨脹のみを計り、取り込むには玉石の別を問はず、出すには手を出すさへ躊躇して、而かも蔭では紅蓮の長舌を出しつゝ密かに會心の笑を漏すなど、常識には判斷も付かぬ擧動を敢てして憚らぬ者もある。假令斯る極端に走らずとも其の福を分つを吝み、而かも其の職工を酷使する工場主ありとせば、其の職工は主人の福利を希ふの念薄く、契約の賃銀に對する相當の勞働も、其監督者の目を盜みて全力を用ひざらんことを計り、何等不平不滿の念なしとするも、主人の利不利に關しては痛痒を感ぜざるが故に、彼の春風靄々たる温情を缺いて、秋風蕭殺の寂

狀を呈し、之れが爲めに主人は孤立の有樣となり、功を唯だ一簣に空うして福利を得るの機會を逸するに至ることあるは又た已むを得ざるの勢である。人望の歸する所は天意自から之れに傾くの道理で、其の人は必ず福利を享受するに至るものであるが、人望の歸せざる所は、福利は將に來らんとして而かも之を逸するの已むを得ざるに至る。されば善因あれば善果あり、惡因あれば惡果ありと言へる因果律に照して、我れ福を人に分てば人も亦た福を我れに分つと言ひ得ることは、既に示す處の例證を以ても首肯せらるゝと同時に、福を他に分たざる者は人も亦た福を我に分たず、其の力を我の爲めに協さず、其の智を我の爲めに用ひずして、事業の半途にある者は其の事業を成功する能

源頼朝の實例

はず、既に成功したる者は忽ちにして其功を失ふに至るは必然の勢である。斯の如きは其の福を分つを能くせざる人で、福を分つを能くせざる人は、又た福を保つことを能くせざるの人である。

源頼朝は偉人に相違はない。偉人に相違はないから武家政治の元祖となつて覇府を鎌倉に開き得たのである。併し其の成功の大半は弟の範頼義經の力に歸せねばならぬ。範頼義經は當代無二の名將で、殊に義經が兵を用ふること鬼神の如きには、流石に平家の諸將も戰慄したのである。史を按ずる迄もなく平家の驕傲は天下の人心を離散せしめんとするに當り、源氏恩顧の耶黨は主家の再興を計るが爲めに頼朝を擁して兵を伊豆に擧げしめたので、頼朝が覇府を鎌倉に開き得たのは、

專ら一門耶黨の力に外ならぬ。而かも其の一門耶黨の力は頼朝の爲めに捧げたものではなくして、頼朝の父祖の爲めに捧げ、頼朝の父祖の分福の恩顧に酬ゆる爲めに捧げたのである。椙山の一戰に大敗して死地に陷つた頼朝は、爾後自から戰陣に臨むこと殆んど稀で、平家を西海に滅亡せしめたのも、全く範頼義經の二弟の力である。尤も二弟の奮戰は兄頼朝の爲めに盡したのではなく、父祖の爲め源家の爲めに盡したので、頼朝こそは勞せずして其の福を專にした譯である。然るに其の業成るに及びては良狗爲めに煮らるの筆法を用ひて、二弟をして無殘の最後を遂げしむべく有らゆる術策を運らし、福利を分つことは固より度外に置き、匹夫も尙ほ且つ忍びざる骨肉の親を斷つに至つて

は、三代にして其の業を失へることの頗る久しきに亙り過ぎたるなきやの感がするのである。

以上說き去り說き來つて、吾等は既に善と不善とに關する倫理道德の中心概念を得、道義の根柢たる智情意即ち智仁勇の三德を知り、仁義道德と利用厚生の調和を計り、利他分福の美德にして利己專福の鄙吝なるを誡め、以て人生の本務に關する大要を示し得たのであるが、更に處世上吾等の最も必要とする所は、常に理想を高尙にし其の生活を簡易にすることである。是に於て克く勤、克く儉、以て分を守り足るを知ることが肝要である。

苟も社會に立つて獨立生計を營む以上は、他人の援助を受けて辛うじて生活するが如きの卑屈は男子の取らざる所で、他人の援助を受くることは既に獨立生活の根本を破壞したものである。されば處世の第一要義は『勤儉にして產を治む』と言ふ事にある。其の勤は積極的の勤勞で、倦まず怠らず、屈せず撓まず、謂ゆる『くろがねの舟もたやすく動かして强きは水の力なりけり』で、產を成す所以の道は勤勞にあるのである。若し夫れ春は花、秋は月に憧憬れ、盛暑を厭ひ、嚴冬を避けて、唯だ休養を名とすれば、一年四季の間に勤勞するの時は幾許あるであらう。朝は遲く起き、夜は早く寢ねなば、又た一日の間に勤勞するの時は幾許あるであらう。一日再晨なり難し、同じ日に二度の朝はなく、一年に同じ日が二度づつある譯でないから、明日がある

儉約守産とは何ぞ

から今日は先づ休めと言ひ、明日になつて又た明日があるから今日は先づ休めと言ふやうでは、一事一業の成らざる間に歳月は人を待たず青年は老い易く、紅顔空しく霜鬢に變じて、後悔遂に先に立たざるに至り、臍を噬むとも及ばぬ事になる。されば油斷なく働き、弛みなく勤めて、自己の獨立生活の第一義たる産を成すこそ肝要の次第である。斯くの如く勤勞は積極的で産を成す所以であるが、消極的に産を守るものは儉約である。儉約にして産を守るが故に質素となり、簡易生活となるので、華美に流れず、奢侈に陷らず、斯くて産を守る所以の道は産を興す所以の道となるのである。されば勤勉力行して産を成し、質素儉約にして産を守るは、即ち生を厚うし家を齊ふの要義で、家産

勤にして儉なれ

こゝに興り、家道茲に榮え、及ぼして國家の隆運に資するを得るのである。

凡そ世間を見渡すに、勤なく儉なき者がある。即ち怠惰優柔で碌々仕事も爲ず、而かも衣食に奢り、冗費を顧みず、口腹の慾に向つて財を散ずる者などが夫れである。斯の如きは遂に家産を傾け、身を亡ぼし家を破り、獨立獨行の實を失ひ、人生の本務に背き、社會の寄生蟲として取り扱はるるの慘澹たる悲境に沈まざるを得ないのである。或は又た儉のみあつて勤なき者がある。併し勤なきが故に産を成さず、産を成さざるが故に財を積むことが出來ない。唯だ儉にして其の産を守るとも、其の産何時迄か能く盡きざるを得んやである。坐食すれば富

も亦た空しく、出るのみあつて入ることなきの産は、其の儉如何に儉なるも亦た到底空しからでは止まないのである。彼の天險に據りて人工を加へ、難攻不落の金城鐵壁と稱せらるる要塞でも、重圍の中に陷つて外援を絶たれたならば、其の陷落は唯だ時間の問題で、早晩降伏せざるを得ないのは、即ち儉のみあつて勤なき者の早晩家産を失はざるを得ざると同一轍である。或は又た勤あつて儉なき者がある。之れは既に勤があるから産を成さねばならぬが、併し儉がないから其の勤に依つて得たる所を空しくするので、從つて得れば從つて費し、却つて或は其の費す所其の得る所を越え、遂に負債を生じて窘窮に陷る者もないではない。恰も笊に水を注ぐのと同じで、注いでも注いでも筒

抜けであるから、到底笊に水の溜る道理はない。或は又た勤あり儉ある者がある。吾等が望む所の處世法は即ち是で、勤にして産を成し、儉にして産を守つてこそ、守成宜しきを得て産を治むることが出來るのである。斯くて獨立獨行、道を天下に行ひ得る所以で、人生の本務も亦た之を全うするを得べきである。若し夫れ勤なるも儉ならず、儉なるも勤ならず、遂に勤ならず儉ならざる者の如きは、須らく其の常識の判斷する所に從つて、改むべきは改め、勉むべきは勉め、以て中正の宜しきを期すべきである。

既に勤にして儉なるは處世の最善たるを知り得たのであるが、此の儉德に依つて吾等は更に足るを知り分を守ると言ふことを心懸けると共

に又た之を實行せねばならぬ。浮世は儘ならずと言ふは人々の常套語であるが、夫れは分を守り足るを知ることを忘れての言葉で、慾望に限りがないから不平悶々の情に堪えずして、遂に浮世は儘ならぬと自分勝手の熱を吹くのであるが、『足るを知れば貧も亦た樂し』と言はれてゐるやうに、足るを知りて分に安んじ、分を守りて放埒ならざれば其處に何等の不平もなく悶々もない譯である。斯くて足るを知るが故に不足なく、其の餘る所を以て不時の準備を貯ふべく、分を守るが故に分外に逸せず、克く家計の秩序を保ちて獨立生活の實を擧げ得るのである。二宮尊德は儉にして守分知足の人であるが、其の治産の要を語るの一節に、貧に處するの心あるべきを說き、『心を貧に處する者は常に富み、心を富に處する者は必ず貧となるを免れず。例へば茲に百石の田産ある者にして、我が田産は五十石しか無きものと心得、常に五十石だけの生計を爲さば、常に必ず富まん。然るに五十石の田産しか無き者にして、我が田産は百石あるものと信じ、常に百石の生計を爲す時は、終に無産の貧者となるべし。要するに何時も貧に居る心持なれば家門は榮え、富に居る心持あれば家門は衰ふるものなり。故に心は常に貧に處して敢て富に處することなかれ、これ處世の秘訣なり』と言つてゐる。如何にも間違のない話で、百圓の月給取りが百五十圓の生活をすれば、五十圓の不足が生ずる。假令資産ある者でも此の不足を補ひつゝある間には、遂に其の産を傾けねばならぬ。況して資産

なき者に至つては夫れが總べて負債となる。而かも返濟の見込なき負債は不義理の極で、全く人格を失ひ信用を墜し、其の結果再び世に立つことが出來なくなる。されば百圓の月給で百圓の生活を營めば何うであるか、夫れは平生に於ては可もなく不可もない。併し不時の準備がないから吉凶慶弔冠婚葬祭若くは病氣災難に遭遇した場合に狼狽せねばならぬ。故に百圓の月給に對して其の二三十圓を臨時の費に充て其の七八十圓を以て生計費に供し、二宮翁の謂ゆる貧に處するの心持で居るならば、一家の經濟は圓滿に秩序正しく保ち得る譯である。學生の學資金でも亦た之れと同じ道理で、其の使用法の宜しきを得れば、敢て下宿屋の支拂に窮する筈がないのである。吾等の經驗に徵す

るに、初めて笈を都門に負ふの學生は、旅費の剩餘、必要品購買の見積り、當分の小遣錢など、多少の餘裕がある。尤も當世流行の苦學生なる者は別として、通常一般の學生は其の學資を父兄に仰ぎ、若くは父兄に代る所の人に仰ぐので、其の初め都門に出づるに當つては、其の父兄の情として旅費にも多少の餘裕を見積り、物品購買費にも幾分の餘裕を見積り、外に若干の小遣錢まで持たせて、住み馴れた古郷を後にし、『男兒志を立てゝ鄕關を出づ、學若し成らずんば死すとも歸らず』と吟じつゝ勇み行く子弟の後姿を眺めて、早くも錦衣歸鄕の將來を豫期するのが常であるから、子弟たる者も亦た此の豫期に背かざるべく勉勵すべきは言ふ迄もないのであるが、學業の勉不勉と其成

績の良否とは、概ね學資金の使用額に比例することを觀破せねばならぬ。即ち眞面目に勉强する學生は決して學資を浪費せぬ。不眞面目な學生に限つて浪費する。と言ふのは學問を勉强すべき時間を以て他の無益なる方面に費すからで、無益よりも寧ろ有害なる方面に用ひる者が多い、從つて餘計な冗費を要し、一定の學資金では到底支へられないので、其處で父兄を欺くの奸策を運らし、同一の書物を幾度となく買ひ入れる。尤も其の實は買ひ入れるのではなく、名を書物に藉りて購買費を取り寄せ、夫れを空しく飲食の費に充てる。勿論同一の書物を幾度も買ふ譯には行かぬから、嘘八百の書物を並べ立てゝ父兄を欺くので、幾十冊も買ひ入れた筈の書物は、實際は唯だ一冊、本箱の中は丸で空虛である。或は十圓の外套を二十圓に、五圓の靴を八圓に懸け値するなどは常習犯で、そろ〳〵質屋の門を潜り始めると碌な事は仕出かさない。酒色に染まり出すと學門は全くお留守になり、宿料の不拂から下宿屋を放逐せられ、月謝の滯納の爲めに停學處分を受け、遂に除名となり放校となるに至つて萬事茲に窮するのである。故に學資金の多きを要する丈それ丈、其の學生は本分を忘れて岐路に迷ふてゐることが千里の外からでも透視することが出來るのである。之れに反して極めて眞面目なる學生は、先づ其の都門に入るに當つて確乎不拔の志を定め、一定不變の方針を立て、規則正しく勉强し、規則正しく起臥進退し、敢て冗費を要せず、不急の物を求めず、勉にして儉、

儉にして節あるから、學資には餘裕あり、學問は上達して行くの一方で、父兄は喜び、知己朋友は敬意を拂ひ、學資は少くして成績は優等であると言ふ有樣になる。之を學資のみ冗費して學校を放逐せらるる者に比ぶれば實に雲泥の相違があるではないか。斯る優等學生の學資金使用法を見るに、恰も平易なるが如くにして實際其の途に當れば甚だ平易ならぬのであるが、先づ其の最初に於ては、彼の旅費の剩餘金當座の小遣錢、物品購買費の殘餘などを一括して、出京當月の經常費に充て、出京當月の分として受取れる學資金を翌月に繰り延べ、若し其の全部を繰り延べ得ざれば、其の繰り延べ得らるる丈を繰り延べ、更に翌月分に於て節約を加へ、斯くして遂に當月分の學資の全部は翌月分に、翌月分の學資は翌々月分にと言ふ風に餘裕を付けると、氣樂に勉强することが出來て、下宿屋の支拂に頭を惱まし、質屋の門を潛つて窮策を講ずるの必要がないのである。然るに彼の浪費者に至つては、翌月分の學資を當月に使ひ盡して尙ほ足らず、漸く其の月を越えた翌月の一日、早くも翌々月の學資を請求して而かも僅に前々月の下宿料を支拂ふと言ふ有樣であるから、本月の學資を翌月に、翌月の學資を翌々月に廻しつゝある模範學生に比ぶれば、其の間の差は非常なものである。斯る非常なる懸隔は畢竟ずるに其の分を守ると守らざると、足るを知ると知らざるとに依るのであるが、固より啻に學生のみに就て言ふべき事ではない。

能く其の中庸を取れ

凡そ物には程度があり、分限があるから、際限もなき人慾を満たすことは出來ない。既に慾望の全部を満たすことが出來ない以上は、物の程度分限に應じて過不及なきの中庸を保つことが必要である。吾等が日常の言語でも行動でも亦た其の通り、『呉竹のほどよき節をたがへずば末葉の露もみだれざらまし』であるから、常に程善き中正を保たねばならぬ。世には其の職に非ずして濫りに他に干渉し、己れを忘れて人を褒貶する者もあるが、此等は其の分を守らずして常規を脱した者であるから、啻に禍を其の身に招くのみならず、實に人を害するものである。若し夫れ虚榮虚飾に趨る者の如きは、其の身を顧みずして華美を求め、爲めに其の分を超えて將來を誤るに至るので、現に某高等

節制とは何ぞ

女學校の女教師が呉服店の反物を萬引して耻を天下に曝した實例などが夫れである。又た如何に質素儉約は美德なればとて、其の極端に走る者は往々にして吝嗇に陷り、守錢奴の汚名を受けて平然たるが如きも其の分を失へる者である。之を要するに上下貧富の區別なく貴賤尊卑の階級を問はず、各々其の分を守り其の度を超えずして、常に中正を保つことが即ち處世の要道に外ならぬ。されば『花の春紅葉の秋のさかづきも程々にこそ酌まゝほしけれ』と言ふ心は、吾等が座右の銘とすべきものである。

此の分を守り足るを知ると言ふことは、又た節制と相伴ふものであつて、分を守り足るを知るが故に其處に節制があつて、用を節して自か

ら制すると言ふことが必要になつて來るのである。即ち日常品でも不急の物があり、或は全く不用の物もないではない。此等の不急の物若くは不用の物の爲めに一家の經濟を紊し、其の生計を苦めるやうでは處世の要道を得たる者ではない。其の不急を節し、其の不用を制して家計をして規律あらしめ、更に其の剩餘を生じて不時の用に充てゝこそ、世に處し道を行ふことが出來る。是に於て簡易生活の必要が起るのである。

即ち足るを知り分を守るが故に節制があり、節制があるから簡易になり、簡易なるが故に規律が行はれ、規律が行はれるから餘裕があり、餘裕があるから心常に安く、心常に安きが故に道を行ふの餘力があるのである。然るに紛々たる世上の人、足るを知らず分を守らず、徒らに外觀を粧ひて內心に不安を抱き、負債に責められて獨立獨行を傷け之れが爲めに虛言、卑屈、欺瞞、煩勞、耻辱の數々に身も心も惱まし其の結果として社會の落伍者となるが如きは愚も亦た甚だしいではないか。此等の人々は暫らく左に揭ぐる俳諧師一茶の勸農の詞に聽きて簡易生活の眞價を味ふべきを忠言する。其の詞に『風流を樂む花園ならで、後の畑前の田の作物に志し、自ら鍬を採つて耕し、先祖の賜と命の親に懇を盡くし、芳野の櫻、更科の月よりも、己が業こそ樂しけれ。朝夕心を留めて打むかふ菜種の花は、井戸の山吹より好しく、麥の穗の色は牡丹芍藥より腹ごたへありと覺ゆ。朝顏より夕顏こそよけ

れ。萩菊よりも芋牛蒡に味あり。すべて花紅葉より栗柿は寶の植木なり。稲の穂並の賑はしく、菊の花より腹滿る心地して、粟穂の鶉野邊の蟲の音聞くが面白く、遠き名所舊跡より近き田圃の見廻りが飽かず松島鹽釜の美景より飯釜の下肝要なり。上作の名劔より鎌鍬は調法なり。書畫の掛物より、掛けて見る作物の肥を油斷せず。投入立花の工より、茄子大豆の正風なるが見處多く、茶湯蹴鞠の遊より、澁茶を呑んで昔語こそ可笑しけれ。玉の臺より茅葺の家居心易く、高きに居らねば落るあぶなげなく、迷ねば悟らず。念佛の替りに業を怠らず、實義を盡すは神詣に比し、仁者に習ふて山には木を植ゑ、智者の心を汲んで田の水加減を專らにし、珍肴鮮肉の料理より、錢入らずの雜炊が

後腹病める氣遣なし。すべて世の中は飛鳥川の流れ、昨日の淵は今日の瀨となる如し。唐の咸陽宮、萬里の長城も、終には亡び、平相國の驕りも一世のみ。鎌倉の將軍も三代を過ぎず。北條足利の武威盡き、織田豊臣の榮も遂に一代なり。時過ぎ世變れば誠に夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にある內、伽羅蘭麝の薫も嗅ぐ中のみ。樂は苦の基財寶は後世の障り、遊興は暫時の夢。他の富も羨まず、身の貧も歎かず、唯慎むべきは貧慾、恐るべきは奢なり』と言へる一節を味へば、簡易生活に依りて得らるべき快樂の如何に大なるかは思ひ半に過ぐることであらう。要するに自ら節して他を煩はさず、自ら制して不羈獨立以て其の生を營めば、何の累か降り懸ることがあらう。而かも吾

謂ゆる長者三代

等が用を節するは生を厚うせんが爲め、慾を制するは善に用ひんが爲めであるから、節約を旨として簡易の生活を尙ぶは、之れに依つて獨立獨行の基礎を鞏固にし、更に大に道を行ふべき活動せんが爲めに外ならぬ。

若し夫れ富豪と稱せらるゝ者でも、守分知足を忘れ、用を節せず、慾を制せざるに於ては、其の滅亡は目睫の間にある。即ち初代にありては足るを知り分を守り、用を節し慾を制したればこそ富豪たり得たのであるが、其の息子は親の艱難貧苦の經歷を顧みず、其の初を忘れて今の境遇に狎れ、柔情荒怠、或は尊大驕傲、或は奢侈豪華、以て節制を度外に置くから、初代の蓄財は二代目の負債となり、遂に三代目に

努力の一般に就いて

時を惜むを知れ

は唐樣で書いた賣家札を、左しも豪奢を極めた大厦の扉に斜に張られて、人をして桑田碧海の嘆を爲さしむるに至るのである。

既に勤儉を說き、守分知足を述べ、用を節し慾を制し、簡易生活を尙びて社會に於ける獨立の基礎を鞏固にすべきを例證したのであるが、更に努力を以て事に當り、努力を以て道を行ふことは、守分節制の消極的美德に對して高貴なる積極的行動の本義である。天體の運行、日月星辰の永久の廻轉、冬去り春來り、花咲き實を結び、混々たる源泉の大海を成すなど、觀じ來れば萬象皆其の努力を繼續しつゝあるのである。されば顧みて人の一生は時間の連鎖なるを知らば、時間を空費することは生命の一部を殺傷したると同一であるから、其の生命を愛

努力の堆積

する者は、時間を活用せねばならぬ、即ち時間を惜みて努力せねばならぬ。『時は金なり』と言ふは金力本位であるから、寧ろ『時は生命なり』と言ふを以て努力に對する妥當の箴言ではあるまいかと思はれる。『汝、生涯を愛するか。然らば汝の時間を徒費するなかれ。汝の生涯とは汝の時間より成るものなればなり』と「フランクリン」が言つてゐるが、『雨だりにくぼみし軒の石見ても難き業とて思ひすてめや』と敎へられたる心こそ、實に努力の堆積の効果の絶大なるを想到せずばなるまい。

努力と奮鬪

然らば努力とは何を意味するかと言ふに、自己の最善最良を盡して精神的に肉體的に目的の事物に向つて勉勵するのを言ふのである。近來は此の努力と言ふことの代りに奮鬪と言ふ詞が盛んに用ひられてゐるが、奮鬪の意味は敵對行爲の場合に限る。例へば自己の獲得せんと欲する目的物を獲得させまじと妨害する者ある時、暫らく其の目的物を直接の對手とせず、之を妨害する所の敵に向つて奮鬪し、其の敵を斃し勝を制するの後、彼の目的物は自から我が掌中に歸するのである。即ち我の目的物は要塞であるが、此の要塞を渡さじと妨禦するのが敵軍である。其の敵軍を打ち碎くのが奮鬪で、奮鬪の結果敵を斃して獲たる物は即ち目的の要塞である。故に奮鬪は間接には目的物たる要塞の爲めではあるが、直接には敵軍に對する攻勢若くは守勢の戰鬪行爲である。然るに努力は直接に目的物に向つて努力するので、自己と目

的物との間に自己を妨害する第三者がない場合を言ふのである。土を積んで山を作るは努力であつて奮闘ではない。土を積むのが自己の力で積むのである、其處に山を作らざるべく妨害を加ふる所の他の一人が現はれざる限り、努力は何處までも努力である。若し敵對行爲の一人が新に現はれ來るの場合に始めて奮闘が起る。併し此の奮闘の爲めに土が積まれて山が高くなつた譯ではない。此の奮闘は唯だ其の妨害者を斃す丈の奮闘で、敵を斃した後は再び始めの努力に復つて山を作らねばならぬ。斯う言ふ譯であるから努力と言ふ詞は、奮闘と言ふ詞が有する意義感情よりも高大であり、明白であり、廣汎であつて、直率眞摯なる意義を發揮し、世界の一切の文明は此の『努力』の二字

に根源を有してゐると言つても過言ではあるまいかと思ふのである。併し此の努力と言ふ意味には、艱難に打ち勝つと言ふことが含まれてゐる。即ち自己の好まざる事でも忍んで之を爲し、苦痛を感ずる事でも之れに堪へて、敢て其の勞を吝まぬ所に努力の努力たる眞價を發揮するのであるから、意志と感情と扞格してゐる場合でも、意識の熱火を燃え立たせて、感情の激昂を燒き盡す所に努力を要する。之を旅行者に就て見ても、其の目的地に達する間には或は風雨霜雪に惱まされ或は峻坂嶮路に阻まれ、或は渴を醫するの水なきに苦しみ、或は食を得るの家なきに迷ひ、幾多の艱苦を經て漸く目的地に達するので、其處に容易ならぬ努力を要するが、人生の旅行も亦た此の通りで、常に

一路坦々砥の如き大道のみではないであるから、周公や孔子の如き聖人でも、奈翁や亞歴山大王の如き英雄でも、新井白石や頼山陽の如き學者でも、釋迦や基督の如き宗教家でも、李鴻章や伊藤博文の如き政治家でも、皆其の努力に依つて其の事業に光彩を發ち、努力に依つて其の事業を大成してゐるのである。唯だ其の大成の後より之を見れば、極めて平易にして何等の故障もなく、順風に帆を揚げて進めるが如く見ゆる場合もあるが、夫れは皮相の觀察で、英雄偉人たればたる丈、常人よりは艱難に遭遇すること多く、幾多の障碍、危難、不安、災害等を經てゐるか判らぬが、流石に英雄偉人たる丈あつて、此等の總てに打ち勝ちつゝ努力に努力を重ねて來たればこそ、萬人の仰いで

趣味と生活の一般に就て

嗜好と努力と

以て大事業と爲す所を成功し得たのである。唯だ常人は一小の艱難にも其の聲を大にするに反し、英雄偉人は一大艱難にも決して苦痛を漏さぬから、皮相より之を觀れば一路坦々として駿馬に鞭打ち、逸足千里の目的地に到達したるが如く考へらるゝ迄の事で、實際に其の傳記を繙けば、一事一物悉く努力の痕を留めないものが無いのである。斯の如く聖人英雄の大事業も皆努力の結晶である以上は、一切の世界の文明は努力の二字に根ざして、芽を出し枝を生じ、花を開き實を結んだものであることは見易き道理であるが、此の努力に添ふに嗜好を以てすれば、其の努力を要すること比較的少くして、其の効果は比較的速に現はれるのである。何故かと言ふに、嗜好があれば苦難を

感ずることが薄く、寧ろ全く苦難を感ぜぬ場合もあり、又た物を厭ふと言ふ感情が起らぬから、其の厭忌に對して堪へ忍ぶと言ふ痛痒も感ぜぬ。從つて我れ知らず全力を其の事物に傾注し、好んで夫れに從事するのである。孔子が『學に遊ぶ』と言つたのは即ち此處の妙訣で、何等の苦痛もなく愉快に學問を研究するのが最上の方法で、之れが爲めに其の進歩も亦た速である。獨り學問ばかりではない、人生百般の事は皆其の通りで、好んで其の事に當つてこそ成功も早く、出來榮えも立派である。彼の園藝に非常なる趣味を有てる人は、常人の喜ばぬ肥料でも芳醇天下に無比なる美酒に對するが如き心持で取り扱ひ、或は害蟲を除く爲めに繁雜なる手數でも、恰も鳥が餌を喙むが如き樂さ

を以て之れに從ひ、雪の降る冬でも、燒けるやうな夏でも、毫も厭ふ所なく、一切の苦痛を忘れて只管花卉珍草の培養に勉むればこそ、其の効果は頗る顯著である。又た旅行好きの人は、山河跋渉の苦難をも左程の苦難とも思はぬから、從つて其の疲勞の程度も頗る輕いのである。併しながら人生一切の事物は到底努力を離れて成功を見ることが出來ないから、如何に嗜好があり趣味に深ければとて、努力を伴はずしては進歩も發達も成功も必し得ざるは勿論である。

凡そ人には何等かの嗜好がある、嗜好があるから趣味が起る、趣味が起るから樂みを生ずる。其の樂みが大なれば大なる丈、苦痛を忘れることも亦た大である。若し樂みが少くして苦痛の大なる場合にも、全

趣味ある家庭

く樂みが無くして苦痛の大なる場合に比ぶれば、其の苦痛を感ずることが薄いのである。之を家庭に就て見ても其の通りで、圓滿平和なる家庭の趣味は津々として盡くることなく、和氣洋々春風堂に滿ち、一家團欒輯睦の間に日夜奮鬪の苦痛を忘れ、更に新に努力の英氣を養ひ得るから、實に生活々動の本據として、又た天賦の樂園として家庭に及ぶものはないのであるが、若し之れに反して其の家庭に風波絶えず父子相爭ひ、兄弟互に鬩ぎ、夫婦相和せず、僕婢も尙ほ且つ渦中に投じて、一家常に喧囂を極め、紛擾を重ねつゝあるならば、不平不快慊惡の情に堪へずして、其處に何等の慰安もなければ趣味もなく、天賦の樂園は變じて焦熱地獄となり、苦痛は益々大に、英氣は益々小に、

趣味なき家庭

生活狀態の分類

外に向つて奮鬪するの力なく、事に當つて努力するの勇なく、業敗れ學成らず、一家遂に四方に離散するの已むを得ざるに至る場合もあるから、趣味の有無が吾等の生活に對して如何に多大の影響を及ぼすかは、之れを以ても思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

凡そ世人の生活狀態を觀察するに、概ね六種の別がある。放縱生活、罪惡生活、不道德生活、名聞生活、道義生活、趣味生活が夫れである

放縱生活

其の放縱生活とは俗に言ふ所の捨鉢主義で、規律もなく秩序もなく、氣隨氣儘の有らゆる放埒を極め、營々として働く者を愚物なりと罵倒し、謹嚴律直なる人を愚直なりと嘲笑し、醒めては酒、醉ふても亦た酒、妻子は米鹽の乏しきを訴ふれども顧みず、雁の鳴くのに白地の浴

衣の憫れさにも目も呉れず、錢あれば家を外にして歸らず、錢なければ寒中も裸體で押し通すと言ふ有樣。而かも自から言ふ人生は僅に五十年、悲むも一生、樂むも一生、寧ろ太く短く愉快に暮すに若かずと何ぞ知らん其の太しと言ふは甚だ太からず、其の愉快なるものも亦た愉快とも思はれず、精神既に麻痺して常識を失ひ、狂態終に正狀に復するの機會がない者である。斯くの如きの生活は其の本人の利害を別としても、社會を毒するの甚だしきものあるは勿論の事である。次に罪惡生活とは國法の罪人として屢次囹圄に出入し、初犯よりも再犯に再犯よりも三犯に、益々其の罪惡を重ね、詐欺脅喝、騙取横領、無錢遊興、毆打致死、賄賂授受、暴動敎唆などの數々擧ぐるに遑なく、唯

だ强竊盜を働かぬと言ふ迄で、其の害惡は遙かに强竊盜の上にある者が夫れである。而かも世人は此等刑餘の廢人に向つて尙ほ或は交際を斷ち得ず、却つて彼等をして益々横行跋扈せしむるの傾向あるは慨歎に堪へぬ次第である。次に不道德生活であるが、之れは僅に法律上の罪人たらざる範圍に於て、有らゆる道德上の罪惡を犯して顧みざるもので、廣義に解釋すれば國法の罪人と同じく罪惡生活であるが、唯だ法律に觸れないと言ふ丈の區別あるに過ぎぬ。故に此の部類に屬する者は罪惡生活と間一髮を容るゝのみで、巧みに法網を潛る點に於て、其の奸黠の度は却つて罪惡生活より甚だしいものがある。假令法律は之を罰し得ずとも、社會は宜しく充分の制裁を加ふべきものではない

か。次には名聞生活であるが、之れは世間に最も多い所の生活狀態で、世人から嘲りを受けまじ誹られまじ、内情は兎も角も表面だけは恥を見せまじ、成るべくは褒められたし、笑はれたくはないと言ふ考へから、善を人に施す迄の餘裕はなくとも、若くは餘裕ありとも夫れ丈の温情も義氣もないが、少くとも惡を行はずと言ふ丈の決心を持つてゐる。而かも義氣温情に富めるが如く言辭の上に巧みなるの點に於て、却つて内心を觀破せらるゝ塲合のあるのが短處であるが、他を害するの惡意はないから、社會の爲めには可もなく不可もなしと言ふ中性に屬してゐる。次に道義生活であるが、此の生活こそ實に人生の本務を悟了したもので、社會の共同生活を助け、其の進歩發達を計るは人生の本務であるから、我れこそは此の本務を行はねばならぬと言ふ道義的精神を發揮し、勤儉産を治め、以て公共の利益を計り、努力奮鬪其の目的の事業に猛進し、守分節制其の生活を簡易にし、己れを後にして他を先にすべく、他を利して己れを後にするを共同生活の義務なりとし、此の義務を敢行するに努むるのが即ち道義生活で、實に世に得易からざる生活狀態である。次には趣味生活であるが、道義生活の美は即ち美であるとも未だ趣味生活の上乘なるには及ばぬ。と言ふのは、道義生活には義務觀念がある。之れあるが爲めに義務敢行の念に押され、人生の本務を完うする上に於て假令苦痛ありとも之れを耐へ忍ぶと言ふ感があるから、何等の苦痛も感ぜず、多大の趣味を抱

如何にして吾等の生活に趣味を有ち得るか

いて、愉快に人生の本務を遂行するを樂みとする趣味生活に比ぶれば未だ一歩の及ばざる所がある。

然らば如何にして吾等の生活に趣味を有ち得るか。生活は一種の苦痛ではないか。生病老死は釋迦でさへ人生の四苦として其の解脱を求めんが爲めに苦行したではないか。世間一般の人間が皆悉く釋迦でない限りは、生活は何處までも苦痛で、苦痛は到底快樂と一致する筈はないではないか。吾等は生きんが爲めに働くのではなく、働かんが爲めに生きてゐるのであると悧巧らしく言はるゝが、开は目的の主體を甲より乙に移した迄で、生きると言ふことも働くと言ふことも、其の説明の爲めに輕減せられた譯ではない。何方にしても生きもし働きもせねばならぬ。其の働くことは遊んでゐるよりは苦痛ではないか。其の苦痛を強ひられなければ生きてゐられないと言ふに至つては、人生は到底苦痛を脱し得られないもので、無味乾燥無趣味も亦た甚だしと言ふべきである。而かも斯る苦痛を忍び無趣味極まる生活を繼續して果して何の効果があるのであるか、仁義道德の爲めに將た天人合一の理想境に達せんが爲めに盡すと言ふの名義は立派でも、世界あつて以來能く幾人か此の立派なる名義を事實の上に現はした者があるであらうか。其の名義の立派なる丈それ丈吾等の身に取つて益々大なる苦痛ではないか。天地一貫の大道を行へ、此の大道に背いてはならぬぞと檻の中の虎のやうに束縛せられて、何處に趣味があり快樂があるので

あらうか。世界を憂き世と言ひ苦海とも言ふのは實に之れが爲めである。と一廉の哲學者らしく論ずる青年などは、人生の不可解を嘆じて前途の光明を華嚴の瀧壺の中に求めんとするの愚を敢てするに至るのである。併し今一歩を進むれば其の謂ゆる不可解は忽ち氷解せられて其處に人生の趣味を感得することが出來るものを。偖ても半可通と獨斷的誤解とは、世にも亦た怖るべきものではある。幵は兎も角も斯る不可解の嘆を發せざらしむべく、尙ほ且つ人生の趣味を解せしむべく茲に聊か說明の勞を執らねばならぬ。

そも〳〵生病老死を人生の四苦なりと言ふものは、肉體以外に精神あるを認めない者の泣き言に過ぎぬ。吾等は精神に生きることを主とするもので、肉體に生きることは人間以下の動物である。精神的人格は肉體の死と共に死するものではない。吾等の祖先の人格は今尙ほ精神的に生きてゐる。孔子の肉體は數千年の昔に於て一塊の土と化したるにも拘はらず、其の人格は益々光輝を發つて後世幾萬の人士を化育しつゝある。されば吾等の苦痛とすべきは人格の高下大小の如何にこそあれ、肉體の生病老死の如きは多く意を用ゐずして可なりである。殊に其の死に至つては『夭壽は疑はず身を修めて之を待つ』の一言を以て盡してゐるから、人間の最も忌み恐るゝ所の死にして既に念頭に置かずとならば、其の他は論ずるに足るものなく、病老の如きは又た固より憂ふるに値せぬのである。

そも〳〵『夭壽は疑はず』と言ふことは、人間の生命は豫測することが出來ないから、豫測の出來ないものを彼是と心配するのは無益である。無益な事を心配せずとも、其の心配するの時間を以て修養を積み其の人格を完成しつゝあるならば、肉體は何時死んでも更に遺憾がないと言ふのが、則ち『身を修めて之を待つ』である。『死』にして既に然りであるから、身を修めて之を待てば、疾病も老衰も毫も恐るゝ所ではない、又た毫も苦痛とするに足らぬのである。若し夫れ働かんが爲めに生きてゐるのが苦痛であると言ふならば、働かずして死んだ方が苦痛でないのであるか。果して然らば働くと言ふことは死以上の苦痛と見做さねばならぬ。何故に働くことが左程までの苦痛であるか。

人は常に働くよりも遊んでゐるのを樂であると言ふてゐるが、遊ぶと言ふことは決して樂ではない、又た實に一種の苦痛である。何故なれば遊ぶと言ふ働きをしてゐるからで、勉强と言ふ働きが苦痛ならば、遊びの勉强も苦痛でなければならぬ。既に働きが苦痛であるとすれば學問の勉强の働きが苦痛で、遊びの勉强の働きが快樂であると言ふ相剋する議論は論理の容るさぬ所である。要するに働きの苦痛であり快樂であると言ふことは、唯だ趣味を有つと有たざるとに依るので、趣味を有てば富士山に登ることも苦痛でない、學問を勉强することも苦痛でない、謂ゆる『藝に遊ぶ』の境涯に達し得るのであるから、苦痛と苦痛ならざるとは『働き』其のものにあるのではなくして、働きに

人生は愉快なり

世界は苦海にあらず

對する趣味と無趣味の如何にあるのである。故に『働き』は苦痛である苦痛でないと言ふが如きは全くお門違ひの議論で、隣りの喧嘩を我が家へ持ち込んだやうなものである。然らば則ち働かんが爲めに生きてゐると言ふ人生が、苦痛であるとか苦痛でないとか言ふ問題も亦たお門違ひの議論で、趣味さへ有てば人生は非常に愉快なものであることは、彼の園藝趣味の深い人が、夏の炎天でも冬の雪降りでも、樂んで花卉を培養するのと少しも異なる所がない。若し夫れ天地の大道を守つて之に背くべからずと強ひらるゝは、檻の中に束縛せられた虎のやうで、全く自由を褫奪されてゐるから、世界は即ち憂き世であり苦海であると言ふに至つては、又た其の根本を曲解するもので、本既に

誤れば末も亦た正しからざる道理である。試に問ふ、何人が曾て吾等に向つて天地の大道を強ひたのであるか。天地の大道は吾等に強ひずとも天地あつて以來宇宙の間に充滿し、其の場所に於ては廣大無邊であり、其の時間に於ては無限無窮である。斯る廣大無邊無限無窮の大道、即ち宇宙の理法の範圍内に、其の理法たる大道を享けて生れて來たのが吾々人類であるから、人類は宇宙本體の一部分で、其の體軀は極めて小いが、享け得た理法は極めて大い。其の大い理法は如何にして其の小い體軀に收め得たかと言ふに、夫れは體軀に收めたのではない、精神に收めたのである。其の精神が現はれて光輝を發つのが即ち人格で、吾等の體軀は朽ち果てゝも、人格は天地と共に無窮に存在し

得るのである。又た宇宙の果て迄も廣大無邊に擴がり得るのである。既に現に吾等の精神には場所の際限もなく時間の制限もなく、自由に且つ自在に天地宇宙に滿ち擴がりつゝ、我萬年前の過去より幾萬年後の將來に至る迄、時間的に吾等の精神の及ばぬ所はないのである。將た又た如何なる顯微鏡の力も見分けの付かぬ極小より、數理の力の屆かざる我が太陽系以外の太陽系の幾多をも包含せる極大に至るまで、空間的に吾等の精神の到らぬ隈もないのである。若し夫れ信念信仰の方面に於ては眞理を透徹し、天地の大道を神とし、宇宙の理法を神とし、我が心の神に合したるを誠とし、此の誠は即ち天地宇宙を一塊とし森羅萬象を一貫して、無限無窮に存在し廣大無邊に充滿せる大道な

りと認識するに於て、吾等の心の誠は即ち宇宙の理法たり天地の大道たるのであるから、天地の大道以外に心の誠なく、心の誠以外に天地の大道があるのではない。されば何人か此の大道を吾等に強ひたりとするのであるか。甲を以て乙に強ふるのは、甲乙同じからざる爲めであるが、吾等は宇宙と一體であり、吾等の心の誠は宇宙の心の誠であるから、宇宙と吾等とは同心一體である。故に若し吾等に強ふべきものありとせば、开は宇宙以外のものを以てせねばならぬ。然るに其の強ひらるゝと言へる大道なるものは、吾等の心に體せる誠たる以上、吾等は宇宙に依つて強ひらるべき何物もなく、宇宙は我等に向つて強ふべき何物をも有たぬ。唯だ吾等の本分とする所は『修養』其のものゝ

一點にあるのみである。人或は其の修養を以て又た苦痛なりとするならば、吾等は更に其の然らざる所以を説明せねばならぬ。

之を要するに人生の苦と言ひ樂と言ふは相對的のもので絶對的のものでないから、其處に一定の標準があるのではない。故に甲の苦とする所は必ずしも乙の苦とする所ではなく、乙の樂とする所は又必ずしも甲の樂とする所ではない。瀬戸内海は世界の地中海と稱せられ、風光の明媚なること他に多く其の比を見ないのであるが、一夜月天空に澄みて銀波揺くの時、左に淡路島影を黑く眺め、右に須磨明石の曲浦を指顧して、一駛百里嚴島に向ふの間、大小幾十の島嶼を縫ひつゝ、讃豫藝備の連山に對して、過ぐる昔の群雄割據の跡を偲び、其の興亡盛衰の史實を追憶して、詩心頻りに動くの時身は船中にあるを忘れて、塵外の仙客俗腸を洗ふの快あるを覺ゆるのであるが、焉んぞ知らん此の夜此の日、風浪殊に激しく、同乘の船客或は船暈に惱み、顏色蒼白頻りに嘔吐を催せる者あつて、客付きの船僕爲めに奔命に疲れたらんとは。是れぞ甲の樂む所は乙の苦む所で、苦樂は物にあるのではなくして我が心にあるのであるから、心一つの持ちやうで樂も苦となり苦も樂となり得る。『何のその百萬石も笹の露』と安心の一路を向けば、其處に何等の苦痛を感ずることもないのである。喜ばしや今日も修養に依つて光明の一端を心眼に認め得たり、明日も亦た更に開悟の樂みを得たきものぞと、其の修養に趣味を持ち、修養に遊ぶの境涯にある

ならば、又た何をか苦み何をか痛むべきことがあらう。佐藤一齋が『我の前なる者千古萬古、我の後なる者千世萬世。假令我れ壽を保つこと百年なるも一呼吸の間のみ。今幸に生れて人たり。庶幾くは人たることを成し終らんのみ』と言へるが如く、幸に人と生れて來たのであるとさへ考へたならば、人たるの道を修め、人たるの道を行ひ得ることも、亦た實に吾等の幸福と言はねばならぬ。幸福には決して苦痛がない筈である。

既に吾等が人として生れ來たのは非常なる幸福であるに相違ない。若し誤つて牛馬と生れたならば何うであらう。或は犬猫或は豚羊と生れたら何うであらう。苦使せられた最後は其の肉を店頭に吊され、其の

骨までも斬りさいなまれるではないか。之を如何なる罪人でも死屍に鞭打たるゝさへ誡められたる人間に比べては、到底同日の論ではなく更に人間の精神的價値の絶大なる天地宇宙の大道と合致するの點に於ては改めて言ふにも及ばず、其の大道を體して自他共同生活の福利を增進せんが爲めに、此處に『社交』の必要が起るのである。故に人間は『社交動物』であると言はれるのも亦た之れが爲めである。元來人の此の世に處すると言ふことは即ち社交の爲めであつて、人は到底孤立の出來るものでないから、自他相交り、自他相助け、自他互に補ふ所あつて、始めて社會が成立し、進歩も發達もするのである。故に人生の眞の趣味は社交に存し、社交場裡にあつて初めて『人』たるもの

公德と社交

の何物かを解し得るのである。之を解し得て交るに道を以てすれば、公共生活の幸福と其の安全とを期しつゝ、謂ゆる理想境に向つて發展向上し得られるのである。

されば公共生活の幸福と其の安全を期せんが爲めには、吾等は社交上に於て『公德』を守るの必要がある。其の公德とは私德に對する稱であるが、英語の謂ゆる「プライベート、ヴアーチユー」を私德と譯するに對して、其の「パブリック、ヴアーチユー」を公德と譯したもので、之れと同一の意義は昔からあつたが、『公德』と言ひ『私德』と言ふ文字は近來の譯語で、而かも現今に於ては盛んに使用されつゝあるのである。其の私德とは單に一私人として自己を守るの德で、廣く公

公德と私德

共に對するものを其の私德に對して特に公德と言ふのである。『天を怨み人を咎むることもあらじ我があやまちを思ひかへさば』と言ふ心は即ち私德の要義であつて、慎重密察、勤儉力行、守分節制、寡欲知足堅忍自彊、自省三思などは、皆私德に屬するものである。『おのが身を顧りみずして人のため盡すや人の務なるらむ』と言ふ心は、即ち公德の上乘なるもので、博愛信義、恭敬禮讓、守約遵法、利他分福、義勇奉公などは、皆公德に屬するものである。併しながら公共を離れて私人の存在する筈はなく、私人なくして公共の成り立つ譯もないのであるから、公德以外に於て私德の獨立を認めるのではない。又た私德を別として公德の獨尊を唱へるのでもない。公私の德相待ち相合して圓

公德の要旨

滿なる公共生活を營み得るのであるが、之を公德と私德とに分つ所以は唯だ個人と公共との對象の別に依る便宜上の區別に過ぎないのである。

利己主義の危害

公德とは即ち自己を顧みずして他人及び公共の權利を尊重し、又た其の人格及び名譽を尊重し、其の自由、其の安全、其の幸福を害することなく、誠心誠意を以て公人たるの義務を行ひ、社交上の德義を守ることを言ふのである。若し自己のみあるを知つて他を顧みず、私慾を專らにして公德を重んぜず、更に公共の利害を度外に置くならば、社會の安寧秩序は破壞せられ、人類の天性たる共同生活の實を失ひ、遂に國家社會の衰亡を招くは必然であるから、吾等は公德の重んずべき

公德と公益世務

を極言すると同時に、利己主義の恐るべき危害に對して充分の用意を拂はねばならぬ。

そも〳〵國家の臣民として又た社會の一員として、苟くも公共生活の幸福と安寧とを享受する以上は、公益世務の爲めに努力することは公人としても私人としても當然の本分である。殊に廣大無邊なる天日の皇恩に浴し、世界無比の慶福に安んずる吾等日本國民は、一意專念以て報效の至誠を捧げ、自己を顧みざる犧牲的精神を發揮し、各々私利私慾を拋つて公益を圖り世務に盡す所あつて然るべきではないか。

公益と私益

偖て其の公益とは社會公衆の利益を言ふのであつて、之れに對する個人の利益を私益と言ふのである。例へば橋梁を架し、道路を開き、公

園を設け、圖書館を建て、施療院を造り、學校を設け、言論の道を開き、貧民を救助し、嫠寡孤獨を憐むなど、皆公益ならぬはない。又た勤勉力行に依つて事業を成就し、財を蓄へ産を興し、質素儉約を以て財用を節し、産を治め分を守るなど、皆私益ならぬはない。其の私益は私慾の謂ではないから、利己本位の私慾を離れて勤儉の美德を以て得たる正當の私益は、必ずや公益の一部を補ひ、公益の爲めの善行は又た必ずや私益を補ふものである。即ち吾等が一定の職業に依り、商人ならば商業、農民ならば耕作、工業家ならば製品、新聞記者ならば文筆、發明家ならば特許品、其の他造船家、漁業家、學者、敎育家、著作家、美術家など、各々其の職業より收め得たる正利を以て一家を

私益と私慾

大義高節

世務と公益

經營するの私益は、又た同時に國家社會の公益たるを得るのである。唯だ夫れ不正手段を以て他人の利益を害し、之れに依つて利己を計らんとするの私慾に至つては、啻に正當の私益を失ふのみでなく、實に公益を害し世務を妨ぐるの罪決して觀過すべからざる次第である。之れに反して正當の私益をも拋ち、專ら公益の爲めの犧牲と爲り、世務の爲めに一身を捧ぐるの大義高節に至つては、仰いで以て百世の師とすべく、傳へて以て千歲の範とすべきものである。吾等は願はくば斯る師表となり斯る模範となり得たいものではないか。

そも〳〵世務とは何う言ふものであるか、夫れが公益と何う言ふ相違があるかと言ふに、公益は世務に依つて益々大に、世務は公益の爲め

に愈々興るのである。其の世務と言ふは國家社會の生存發達の爲めの必然の業務で、公人として又た私人として吾等が日夜從事する所の業務は即ち世務の範圍内である。故に個人より言ふ所の個人の業務も、國家社會より言ふ所の世務も、其の性質に於て種類に於て何等の差別があるのではない。唯だ其の異なる所を求むれば、個人に於ては業務其の物の本體を主とし、世務に於ては業務其の物に對する精神を主とするものと見られ得ることである。併し個人の力は共同の力に及ばぬから、假令同一の業務に於ても個人の力の及ぶ範圍は、共同の力の及ぶ範圍よりも狹小であることは免れぬ。此の點に於て世務は概括的廣汎の範圍に亙り、個人の業務は特殊的狹小の範圍を限つてゐる。而か

も其の本體を主とするにも精神を加へ、其の精神を主とするにも本體を離れることは出來ないから、世務と個人の業務とは到底劃然たる區別を付け得るものではない。

然らば其の本體の主、精神の從、若くは精神の主、本體の從とは何う言ふ意味であるかと言ふに、農夫の業務は耕作と言へる本體を主とするが、世務の精神は其の農耕の改良を計るにある。此の場合に於て世務としての農耕の改良は、概括的廣汎の範圍に亙り、一農夫の耕作は特殊的狹小の範圍を限つてゐる。商業も亦た其の通りで、個人としては直接に商行爲に當り、世務としては商業の發達を計るにある。故に又た工藝の從業者と、其の工藝の進歩を促すと。水利山産の從業者と

其の改良發達を計ると。純朴律直なるべき個人の務めと、民俗の敦厚を計る所の世務と。法令を遵守する個人の義務と、綱紀の振肅を計る世務の任とのやうに、本體とする所と精神とする所とに主賓はあるが個人と雖も改良進歩を促し、敦厚振肅を計りつゝあるのであるから、唯だ其の程度と範圍との高低廣狹の別があるに過ぎないのである。

斯くの如く公益を計り世務を開くは公德の要義たるは勿論であるが、吾等は更に選擧の公正を期して益々公德の美を發揮せしめねばならぬ苟くも立憲政治の恩澤を享受せる吾等日本國民は、憲法に規定せられたる義務を恪守し、又た之れに依りて授けられたる權利を尊重するは即ち公德を重んずる立憲國民としての本分たるは言ふ迄もない。而し

て議員の選擧は立憲國民が尊重すべき所の權利の一であるから、其の選擧の公正を期することは又た至當の本分で、公人として公德を保つ所以の公道である。其の議員には、國會、府縣郡會、市町村會議員などの別はあるが、等しく國家又は自治體の政務に參與する名譽の代表者である。此等の代表者を選擧するのであるから、極めて公正無私たるべきは當然の責務である。故に責務と言ふ點から見れば、選擧は又た國家及び公衆に對する義務で、即ち公德を全うする所以の道である。されば選擧權を放棄する者の如きは、自己の權利を尊重せず又た其の義務を顧みざる敗德の行爲である。若し夫れ其の選擧權を濫用するに至つては、實に國家及び公衆に對する罪惡の行爲である。例へば知己

朋友であり或は親戚關係があり、若くは同鄕人であると言ふ情實から其の人物の如何を問はず、甚だしきは刑餘の廢人を選擧して顧みざる者もある。或は商業上の取引關係、或は債權者債務者の關係などの利害、其の利害は單に個人關係たるにも拘はらず、公共の利害を眼中に置くの遑なく、又た固より其の人物の如何を問ふを待たず、唯だ自己の利害に急にして濫りに其の人を選擧する者もある。或は又た會社の使用人が其の社長より、小作人が其の地主より、舊藩士が其の藩主若くは舊家老より、學校出身の實業家が其の舊師より、一村の壯年者が其の長老より、若くは一郡一縣一町一市の選擧者が官憲の高壓的干渉により、或は反對派の壯士の威嚇に依り、權威の爲めに制せられて自己の意を枉ぐべく餘儀なくせられ、不當の議員を選擧して公益を害する者もある。尤も選擧取締法は其の不正行爲に對して充分の制裁を加ふるは勿論なりとは言へ、投票の賣買、賄賂の授受の如き、殆んど天下一般の常習犯に對しても、秘密の間に巧みに之を行ふ者の罪跡を檢擧するの困難なるものがあるから、會々之を檢擧し得たる所は實に九牛の一毛で、之れが爲めに選擧の公正を保つべき反響を與ふる力の莫大なるものあるとも思はれない。要するに選擧民各自の良心に訴へて自覺する所がなければ、凡百の規程も何等の効果を見ることが出來ない。尤も國民が選擧の公正を其の取締法に待たねばならぬやうでは立憲政治の恩澤を無視すると共に、其の眞價を解せざるものとして、